

確實
再解
新聞

第
壹
號



特別
18
797

確實
再解
新聞



明治九年第三月十二日
官許

官許

確實画解新聞

明治九年
五月十五日

雜報

編輯 八尾徳藏

次
記
侶



○明治六年一月一日取調べに成たる日本國中の人員は三千
三百三十五万六千七百七十五人のうち男が千六百八十九万七千七百
七十九人女が千六百四万八千九百四十六人なり。年齢八十以上
の男女合して七万五千八百八十四人。○社の數は十二万三千七百五社
○寺は八万八千四百六十三寺但し(薩摩)大隅(十勝)釧路(根
室)千島等の國よの寺はさかまじり。○戸數は七十二万三千三百
三十軒。○郡は七百十六郡。○區は七千七百六十四區。○村は七万
二千九百九十九村。○町は二万二千五百五十八町。で有まじ。

確實画解新聞

○第五大區小區天王寺村清水觀音
表門前九十一番地青物商の
小松權兵衛其妻お富

へ今年四十余にて八年
跡より専主へ中風よて
立居も自由ぢうさるを
歎と何とせんうもなき
漸く膝をえんやま
とむらりの幼女を
十三四迄育てくる
其年月の艱難辛苦



心優しく乳の勇しく日毎夜
あそぬうらうと起き夫の穢れものを洗い
一荷の水を擔ひ來て炊きむる間病人を勞り食事が濟は
店飾り草鞋を履て雨の降る日も風の日もつとむ天満の
市場よりうひ青物を仕入まよ行て戻りに得意廻りも權
兵衛が丈夫を時少もくつを男勝り小働きて草鞋をぬぎ
縫針まこと其間よも病人を按摩する母親の直なる道を見
ぢうひー娘おあのも人せも勝まで諸事よかしくてさけて
父母の孝行して父の看病のふ及ばぬ母が手助する間よ
讀書筆や縫物の警古もれらうらうら其さしき母親が教へよる
とい言ひぢうら天真女恵たまふてかゝる賢女をさづきまあひん
と人、が譽て居外とせ

○松嶋高砂所貳丁目の谷沢小松とくるものへうき川
 竹小流きつゝさる藝妓やまごころさたる心さふおなぐ
 顔容の美しきいふまでもやう年ハ廿はたふ称ども
 性質の柔しい女よて一人の母を
 だへどにけ孝行盡し
 お客に實意もつて
 勤め其真實と
 姿色とを
 愛るお客
 がまねひ来て
 野辺に小松のうきなうで



しるび根引よるやうに抱て子の目と心をけのろく言ひ
 寄る人もあまご否とむろりの返事のと應と云ふることハ
 無とのこと是でこや各よる松の色くの操たうき藝妓
 ぞと譽言てもよいと云ふういさ
 聞ても氣かよいでハ
 ないうちんと
 ういさき藝子サン
 てくごとやを
 やめはして
 實意で
 勤めさんをや
 おこのと申外



○俳優中村翫雀が此程東京より戻り一時の乗り込
 迎來めづりき人気が有りまゝ此翫雀ハ
 元玉藏とつて故嵐璃玉の門弟でありはし
 少シのけが有て師の跡を續ぐ成駒屋の家名を
 相續して居り升が乗込を仕と明る日女房を
 呼んで金子幸円出してくまこと云ひ升と
 女房ハ其金子を何とせよと尋ね
 イヤ外でもわが今度此様銀をこれ
 且那が大出の金子をうけて立派な
 乗込をやるやうに成りこのも皆
 先師豊島屋丈のおかげじゃと云ふ



聞らば近頃ハお内の都合も余りよく無いとの噂さ
 也些少ぢが此金をお袋さん進める積りだと
 言へ女房もやまへ何より善い思
 召しと早速出して渡りまは翫雀ハ
 其ま豊島屋へ行お袋さん面會して
 いと懇先師へ報恩の
 志をの花でも買ふて
 佛前へ備へて下ささ
 言、い、差出せばお袋も大ッウ
 喜び涙ぢがと受取て其翌日
 豊島屋が存生中用ひ根本入(箱ト三)
 を禮ぢら送つといふ評判がワカ



●ヨリ
 実先
 師の恩を
 此まきぬとハ
 殊勝を志
 イヨ成駒
 屋
 (以上)
 浪花
 新聞
 有
 マシタ

○甲州貢川村の中込

市島とつふ人の兄が二人

有と何の子細が有のう

他人同様まで少しも

親しくせず

お捨てあり

まうとが市島

ハ一昨年より

病氣に成り

目も増しおとろへて

女房が一人り稼ぎ薬代さへ

覺束をいほどのくさし此中に



市島は今月日明日との小程よてい

せんと思か折しも兄太右衛門の鮎松

太良が家前を通りしやへ呼んで市島へ

重き頭をら多耻うしことなごう今月十三日

のお祭りにて近所での

餅をつくといのが私に

此通りくしし困り

殊に今夜も知らぬ大病や

餅どころでいなのが世間へ外聞も



このいどドナが餅采三升とけ呆まのりとのかを松太良へ聞て大き

怒り叔父さん心々で貧乏むるのたぐあやこの勝年ど私に控ん

な相談へようかのりませんと言、まてて出せさし跡し市島へ

現在の甥のついでに市島が通るの兄清を門
 前の中へ話をするを道太島ハ
 聞てやまへいと易い事やへご
 安心なさい実の私も叔父さんの
 難法もご病氣も知って居り
 はしとが親父があの通りやへ
 是までお構ひやませ
 ぢんごが此大病でハ
 叔母さんも嘸お賢
 がおまませうと



深切にやて自分の小遣
 のうちで餅米六升
 買外は金壹円出シ
 市島が枕元へ差出
 何やお口以合とめめぢうと
 買おておあがりサイと病人
 を喜ばしとつが假令何程の款が
 有とも今も知まぬ病人ぢうとどと追も
 深切を盡さるべ人の道でハ有ぬすまこと
 讀賣新聞は出て有はししか実小彼松太良と
 道太島とハ黒白の相違でハ有りません





名おーお浪花の陽地と
 聞へる鳩の内とくの南河岸
 軒のきふてせー行燈も
 太と字の妓樓京久と
 歌よ騒げよ謠うたよ舞まと客も
 藝者も大醉倒あどろりはむひき

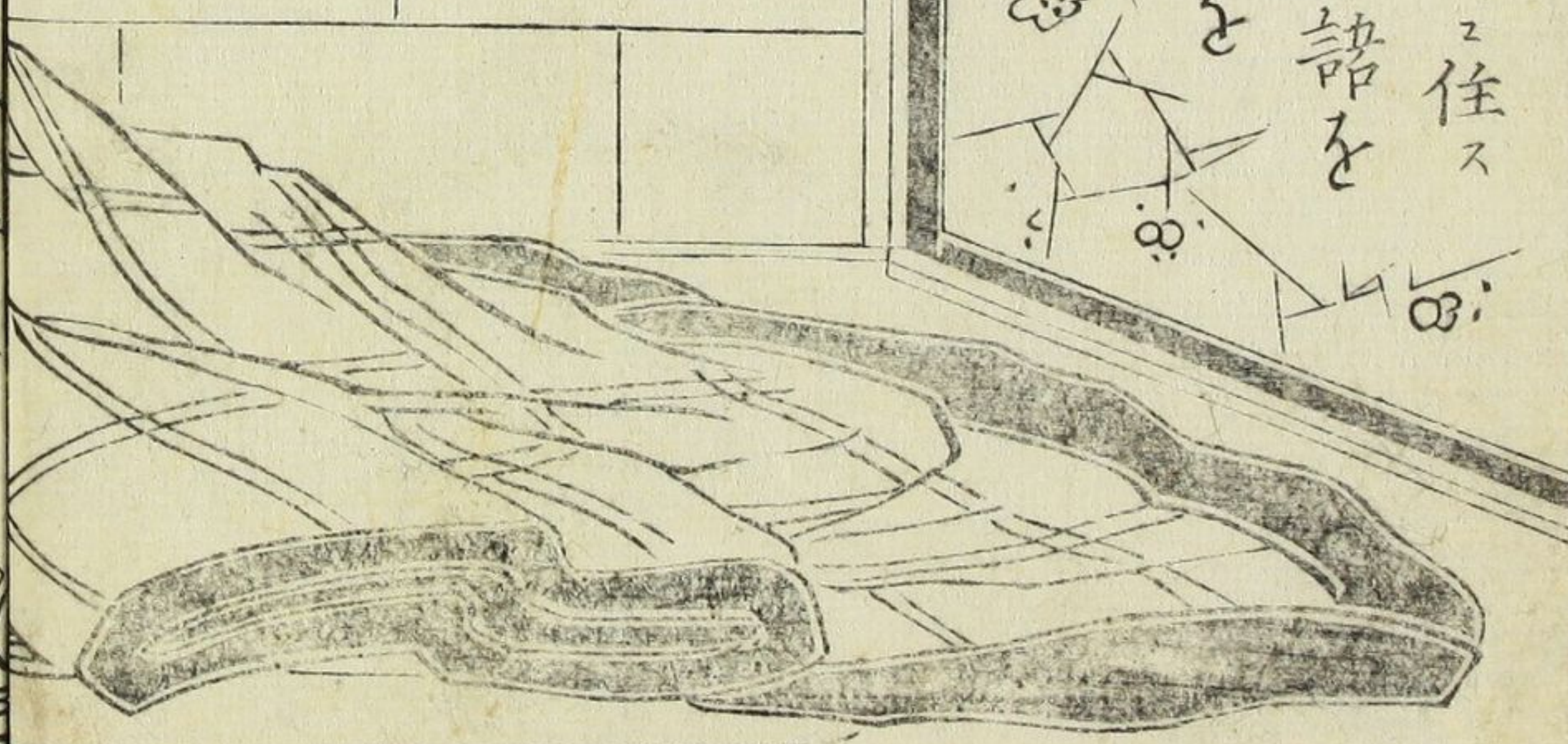
なや此事コトダヨ
 同おな川竹のの流
 泥水どろくさ
 氣きをめて濁み
 らぬよお清きま
 すが婦女の
 常でハ有り
 りません
 っ

大一座お排けと櫻の色いろくべ愉快ゆき
 極きる樂たのしみも花はなおあはじしのささはりと
 予や如何いなるさ誤ごの有一おや
 今いまを盛さかの房ふ鶴と年とし増ま盛さかり
 の國くに鶴と辰つし己の園そののおまま
 なるでりまつりしし糸いと口くちの解とき
 とりまぬ物ものあらがいカカ米こめ八はと仇あ吉きちも
 心こく有りし思おもひるまど持もまいの戀こいも
 是これなままごとかしし事こと知しれぬ事ことも
 女おんなといふのめい何なに事ことも
 優やさしくせねばならぬせんはて
 姉あねといふの中なかへい



大坂
 日ひ後ごニ
 右みぎリ
 ママンンタ

○笠形三大區八小區阿波座堀裏町之住ス
 竹本喜代作といへるものい當時浄より語を
 業ひとなり一藝名住太夫とて其名を
 四方おとろろすのとなりて
 意も直ある
 竹本の幼弱より去目人となり
 十四戈の頃笠形三大區廿小區船津
 町淡路屋喜右門の弟子とあり
 浄瑠璃藝者として居りまじしが
 フット喜右門の病氣ニとりあはせ
 日ならず死去なせしが其妻のがハ
 親類もあく身よりもななくいしく



歎いて居一を喜代作ハ実意なる
 者やへこまを見子先師に恩蒙
 を報せぬがため師の名跡をつき養
 母のぶをやしない日々演戲
 場へ出業せしが養母ハ
 多病より出業中ハ
 介抱人を附おき滋養等
 こと
 ちく供給一歸宅ノ上ハ
 自ら懇切に撫摩一望の品ハ
 好ま任せ其意は背かず孝養を
 勤めまごとの上紀州に在る



丙親も孝行を盡し其身ハ質素をまもり同町此難渋人
 金錢を恵み且去ル申年より往來人の爲太島助橋筋新井久兵
 衛と申合せ常夜燈出し陰徳の志深く育人の身ハ神妙の至とて
 明治六年、大阪府より御褒美をいさぎよくし、今尚いま
 おうとうと孝行を盡し、実小陰徳を人ダト子ダナント皆さん
 ギツ、とひつて眼が有りなご人情のよろぬ奴ッが諸新聞紙お
 も載て有り升が此育人さんハうんしんで有りません
 ○此度中村宗十島ハ俳優を止めて吳服商と開化を
 藤井十兵衛と改メ、船仙丸も伊三島と改メ四月二日、島
 内太左エ門橋筋八幡を、北、入野で開店をつくりは
 と猶くハ一きハ次号、と出しませ

明治九年第五月十五日ヨリ一月毎三号出版

十五日 十五日 廿五日 發兌

大阪府下

第三大區十小區

新町通一丁目廿二番地

編輯印刷兼 八尾徳造

第一大區十四小區

道徳町一丁目一番地

出版人 新物三島

新画實確
新編



第
貳
號

新編
實確

新編實確

新編實確

新編實確

新編實確

新編實確

新編實確

明治九年 第三月十二日
官許

官許 確實画解新聞

明治九年 五月廿五日

○追々賢いお子達こどもたちがふみ升あがり故ゆゑ嬉よろこしいことことで有り升あがり去いル四月十日
十二日大坂府下小學校下等卒業生徒せいとの學力を試験しけんが有り
褒賞ほうしょうとして物理楷梯かいたいヲ一部宛項せんぐわんききし其お子達ハ左の如し

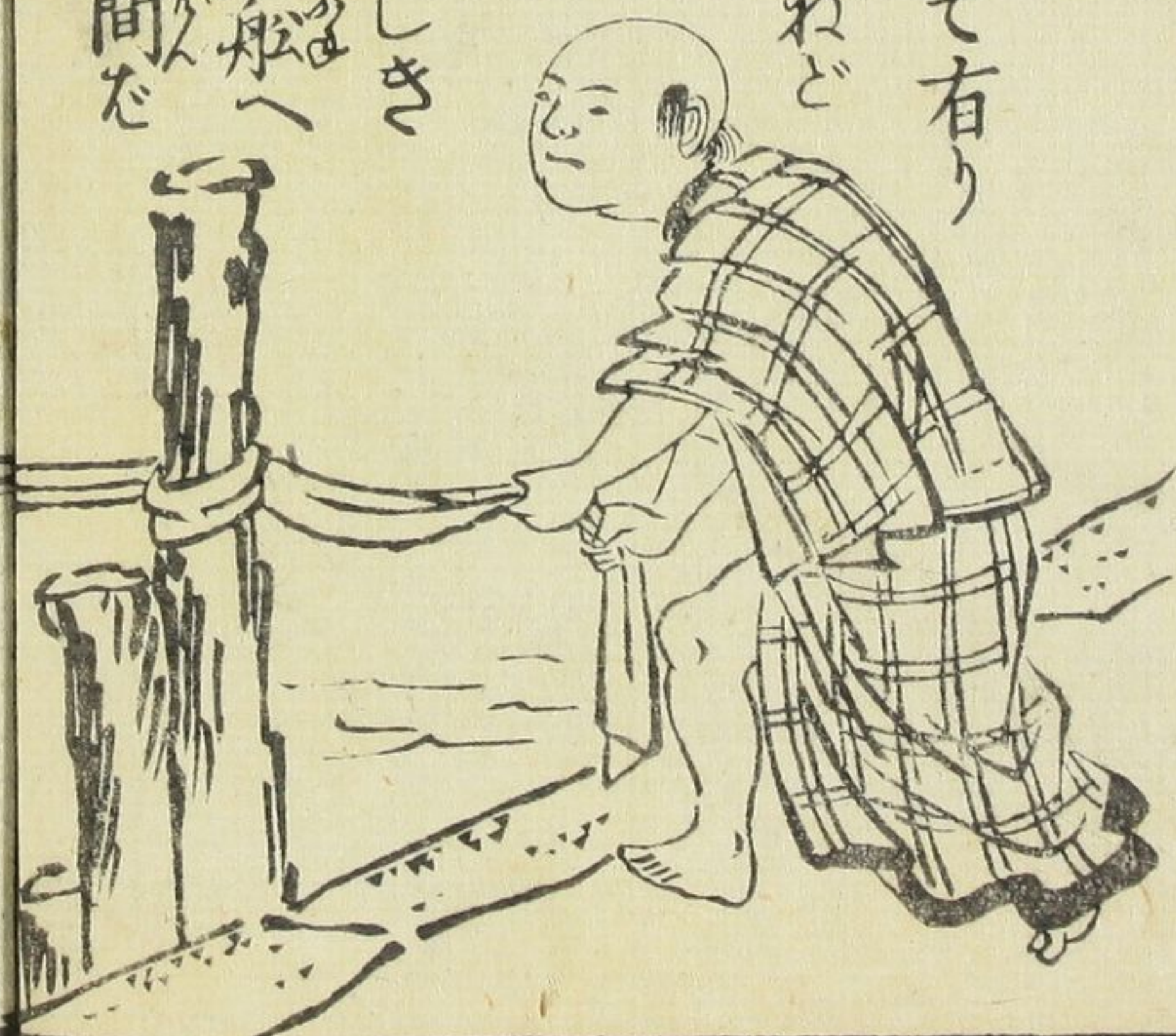
男生徒

- (山田得之助 十三年五月) (河井九兵衛 十年八月) (横溝幸太郎 十二年三月)
 - (一尾松三 十二年四月) (中尾安二郎 十三年六月) (北山初太郎 十二年九月)
 - (塚口鉄太郎 十四年八月) (門田平三 十二年九月) (中谷善三 十二年十月)
 - (松木安太郎 十三年九月) (松木小三郎 十三年三月) (川崎松太郎 十二年六月)
- 女生徒

(土肥) ちよ 十二年 (六月) (重村) つる 十二年 (九月) (重村) まさ 十四年 (五月)
 (上村) きり 十二年 (九月) (上村) てる 十一年 (十一月)
 世間の學校へ往く子供衆達も此の子達も此の子達も負ぬやうに五勉強を
 さいませや

○今一ツ賢い子が浪花新聞よ出て有り

ま〜〜がねいことへ名がこころませねど
 其ま記〜まを本月廿日舟津橋
 の上手に一艘の小舟が繋いで有り
 ま〜〜が傍る雪隠より商人らしき
 男が出て来て手を洗つたり其船へ
 飛込トタンの拍子に維繩が切て三間を



かり川中へ流き出〜生憎楫も掉も無けとバ尺アロヨ
 く〜と謂〜とこり途方よく〜折々川端へ
 遊んで居〜七八ツの男の子が是を見て
 チヨ〜と早足は江〜あり手早〜帯と解き
 維繩の切端と結ひ合せ其先へ小石と縛り付
 其船と目掛けてハッシと放遣れ商人の
 喜んで受留め急ぎ忙
 て、引寄んとすると子供
 ハ聲うけ「モシ〜叔父サン
 お待〜くお前〜大き〜
 私〜小〜に引〜と〜私〜



川へんもるふ」と言ひせらるる側なる杭小其先とシツカと維比船が陸へ
 付と其儘帯を取てくろくと體へ巻付けサツサと驅出とふが商人
 ハ周章コレ坊や〜今のお礼小菓子せらるる買ふて進ぜらるる少と
 待てお是と呼ど跡さへ向うどして何處へ行て仕舞とよること実よ
 年齢似合ぬ頓智といひ志行といひなんと感心を子供でハ有りません
 此志で成人とるまで學業よ身を入き益く勉強したる定てある
 このよなるきませんヤレ〜未頼母〜い童子も有まばあるの

○前号にチヨット申ておきはし〜中村宗十郎能優業を止りはし
 おてはハ諸新聞紙へろ〜出て有り非実小能優の一等と賞は
 既小能優業鑑札返上と前日我弟子のころを呼集何の委
 細もろちのぞが我所持の能優必用の器品ヲミをせし〜

配分せ〜がちにも中村金平郎(元斤岡寫作も
 何事せん定て我が藝道の未熟なるを教
 諭さるること思ひ早速驅來しよ
 思の外宗十郎ハ氣嫌よく金十
 身向ひお前へ格別見所が有る是ハ叙が
 今迄秘藏〜し〜舞臺刀せらるることお前
 に進上もろろ随分是ろ勉強して大立
 者よ成て呉レヨとあるも昨年の
 二の替り大當りとし松平
 長七身役の時小遣〜
 二夫をらして持させ〜早切の



新抄重なるもおもしろ。人の何とも意旨（現在の経世教十人の類も然る）
 浮況と悪評と心とせめて中嫌せんと心と決し。年若きものより。そ方も知
 る如く。其炎非とも焼失する。滅稀する天災と。俗人の疑をよび。いふ愛
 ひと余延る。人の疑のことも失い。且多人数より。此類も。世に流布する。と
 却ち悪評なきにも。あま。今又本席せよとも。流中。蓮の濁り。深き
 淵あり。知。固ては。友徳。余を。も。時。上。ま。本席の。通。り。被。り。と。も。遠。き
 る。い。の。は。じ。如。行。で。あ。ふ。と。教。を。ぬ。私。を。と。と。名。が。く。追。及。く。い。不。潔。を。下
 且。火。名。の。経。世。の。地。の。裏。腹。を。流。溝。と。も。心。を。感。と。は。友。限。り。の。出。席。と
 義。徳。行。い。心。併。て。人。能。優。と。退。き。私。放。諸。君子。と。思。ふ。如。何。存。存。一。元
 徳。人。経。世。の。次。身。も。有。之。と。付。一。友。を。席。仕。わ。せ。決。心。い。か。ん。ぞ。不。復
 経。世。同。化。の。中。名。入。可。中。い。依。り。度。の。再。給。令。と。一。世。一。代。の。名。残。く。為。

本席仕り。後年の。中。安。軒。素。徳。い。何。年。及。於。河。川。竹。竹。引。と。名。戸。物。身。
 姫。愛。光。来。友。友。伏。せ。難。う。た。地。と。座。本。と。初。統。と。潤。と。成。と。地。
 繁。栄。と。心。き。教。を。ぬ。私。を。と。と。名。が。く。追。及。く。い。不。潔。を。下

月 日

叔宗十郎八藤井十兵衛と改。出。鳥。の。内。
 二。休。摘。八。幡。勘。北。入。所。へ。吳。服。店。ヲ。出。シ。
 四月二日。音。の。間。抄。物。仕。集。と。の。票。告。
 を。大。阪。市。中。不。殘。配。り。は。し。と。す。
 イヤ。毛。當。日。う。婦。女。子。達。が。押。
 よ。さ。し。く。店。先。の。群。集。し。て。



確實新聞

往來ぐでさぬ程で有りはしと商いの賣高余程有りはしと様子
志し四月十八日の竹田芝居より出火の付坂惠座の表木戸裏口も
まさりの用意として普請がかへりはしとつき初日ぐ延日なりはしと
いふく五月十八日ぐ番付出しで有りはしとあつと初日ぐ大
入で有りませよヤレホ廣屋ドッコイ十兵衛さん親玉

○東京下谷長者町二丁目七番地に住む秋元某といふ老
人へ貧苦の上は三年越の病の床に臥し娘のてつは早く
夫も別き一人りの女子を抱へて母諸ともよ
甲斐なく病入を介抱しとことごと女
計りの手稼ぎにては其日の煙も立て
薬で薬りの代も煎り詰りしとくバ



てつは小児と母おまかせ下總の國西室珠花村の
貸座敷鈴木樓に身を沈めりき川竹の
苦しみも親の爲めごとと落る涙を
笑ひふまじしとつづの金を送り
て親子三人を養ひ居りしが
老人の遂に三月十五日に死去しと
の郵便を見るよりてつは悲嘆に
暮る其夜主人よ告て身の暇を
征ひる小樓主の云ふに其嘆き
尤もさほど今更急ぐこともなく
幸ひ來月中旬よは是れ出京



せねハ
ぢつぬ
用事も
あり其

節同道

せんとの言葉は何と答も

詮方なく獨り涙の雨

に袖を絞りて居るを

同村の出羽屋に旅宿と

熊谷縣下江尻村の高大澤

某が傳へ聞き其心根と不便に思ひ



早速樓主に裁合てつもの借財を償ひ

てつもの連きて出京し長者町へ送り

届りき母へ更なり子供迄

悲のうちの喜びは何小聲へん

かのもちく親子二人りの物語

と傍に聞く者までりひ涙小

袖を濡しりる大澤某へ初七日の

墓詣りまで心切お世話をせし猶母親に

孝行すべしとてつに諭して歸村えり

てつもの如き孝婦へ近頃聞く事稀なり

又大澤某の義使も益々得がらるべし

報知新聞ニ
有シオ其儘記マ



○サツく又々嬉し〜実小
難有い事が大坂日報第七十六号

五月十九日の新聞に有ま〜とく
讀と共儘書〜

誠不感心な事で聞ても涙が

こぼるといふおんな〜西京府下

下京第十八區月見町七十番地

版木職奥田徳治郎(十年二月)の孝

行と其母つゝ(元年三月)の貞節をので

五座り并此つゝ夫長兵衛は六年前

病氣にて起卧も自由な〜

女は夫も夫の家業と見習ひて

晝夜精出〜其間いへ夫の

介抱〜子供の世話迄

瘥き所へ手の届く様致〜はし〜其精で

長兵衛の病氣も一旦ハ癒〜昨年

の五月十日神事中の大火にて類焼せし

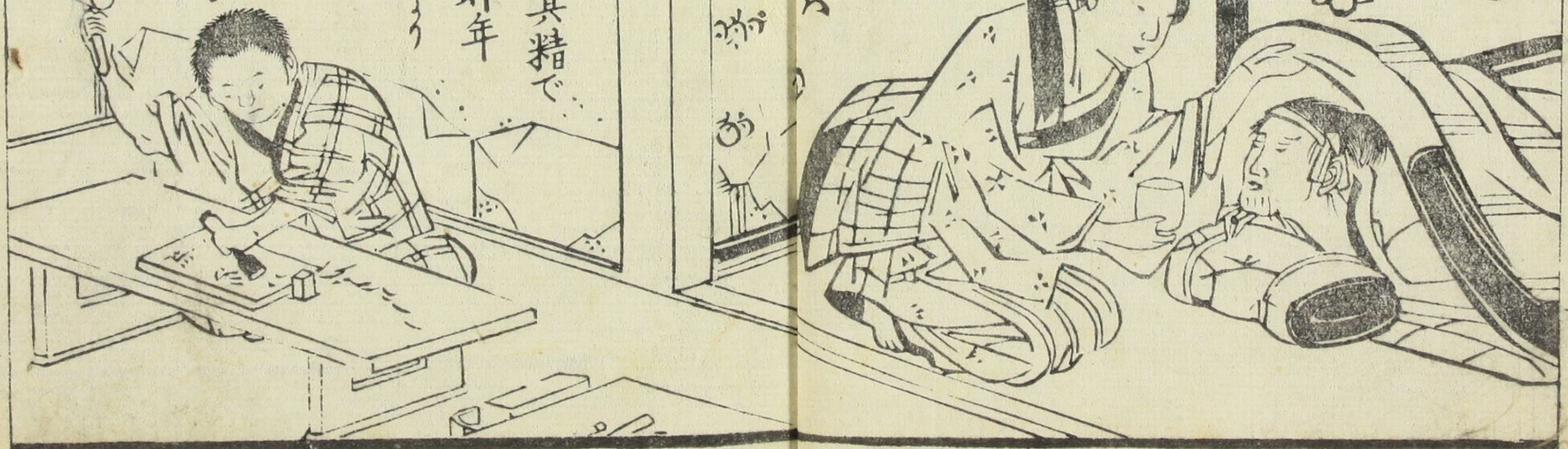
又も病氣が再發〜こんど六歩く事も

出来〜言諸も分明ぬ〜重り〜

〜つゝハ〜心配〜徳次郎も

家業を教へ神社仏閣の祭日に

〜境内へ店へ出〜徳次郎も



石室 新刊

序彫^いなとて致さるるも參詣の人々も皆其幼雅を憐^{あは}みて我れもくとして
注文も故細^こくも煙を立て居りし徳次郎ハ日々早く起^たて本國寺の
清正公へ參詣^まりて親の病氣平癒^おと祈^{いの}りしごとくつとぞくハツ世間
の沙汰とてより戸長梅原さんより金三圓町内中より一圓家主より
五十錢中にも正副區長さんより金五圓に左の書面を附て快力さ
はした其文言

其許殿兼^よく兩親へ孝心篤^こく就中父宿病之介抱行届其上乍幼
晝夜稼業^う勉勵^{べん}致候段衆童の龜鑑^{てん}とも相成神妙之事に存候依
而為快力乍些^ち少青銅五十貫文進之候事

區長 富田 太十郎
副區長 木崎 嘉平
明治九年 四月十日
奥田 徳次郎 殿

くまを見るより親子三人ハ天不喜^あひ地に悦で益家業と勉勵^{べん}
病人と大切に致外は總て人々への斯ありとさめのでり外

明治九年 第五月 十五日ヨリ 一ヶ月 毎三号 出版

十五日
十五日
十五日
發兌

大阪府下

第三大區 十小區
新町通 一丁目 廿二番地

編輯印刷兼 八尾 徳造

第一大區 十四小區
道徳町 二丁目 一番地

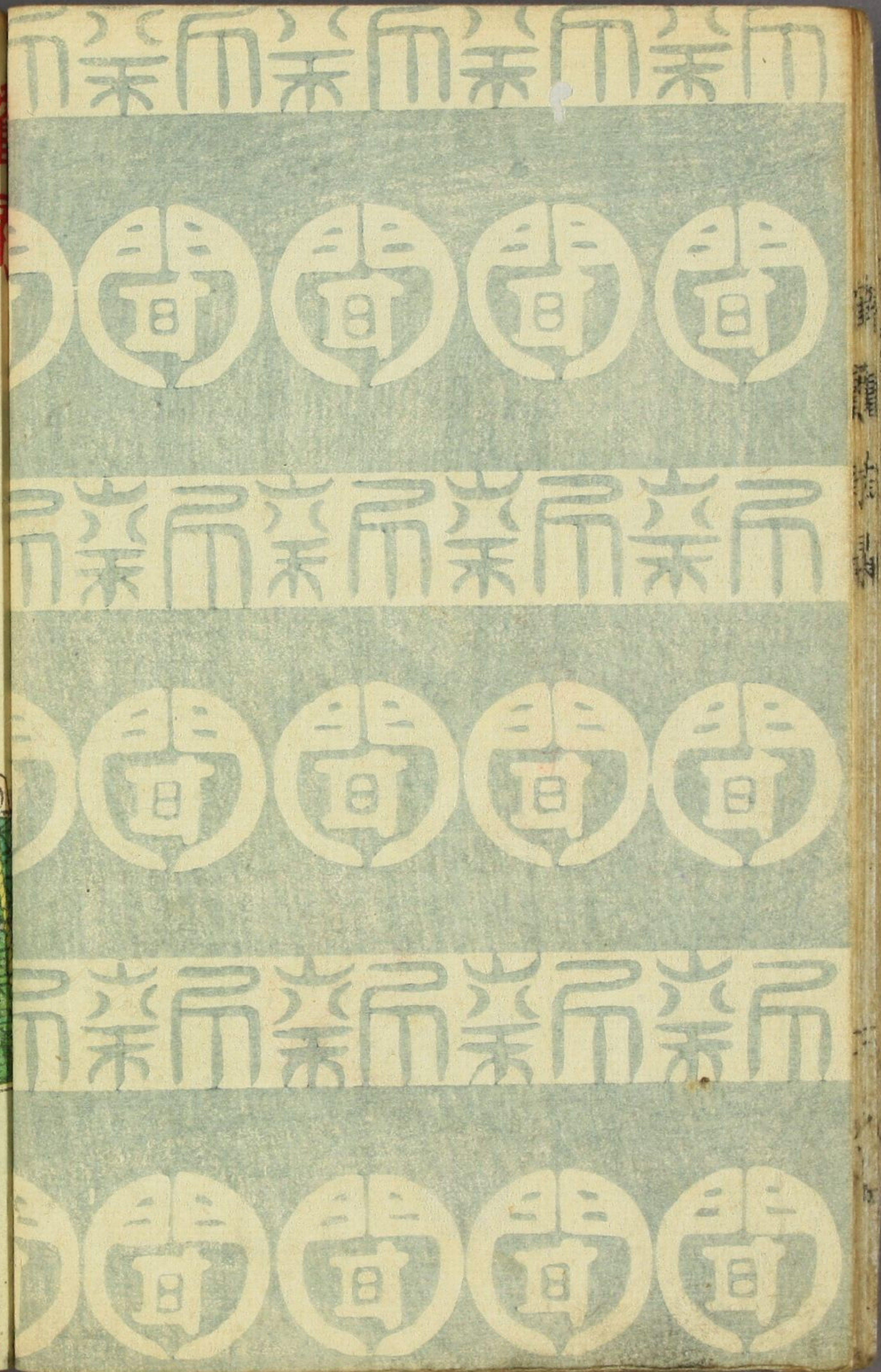
出版人 新物 三島

第三号



新聞 新更解

新更解



明治九年 第三月十二日
官 許

官 許 確實画解新聞 明治九年 六月五日

○當九年四月分の警察月報と記載は、巡査官のお盡方を看客にお報知せりよまを強盜に押入はし戸數が十戸。竊盜に逢ひし戸數が七百七十八戸。追刺に遇ふものが八人。拘摸に遭ふものが十三人。盜まはし金高が四千二百九十四圓七十三錢五厘。衣服雜物が六千二百九十二品。穀高が十四石三斗并七合。捕縛になし人員が三百二十四人の内、譯強盜が十人、竊盜が百三十三人、放火せしものが二人、貨幣贋造せしものが二人、疵を負はせしものが十二人、雜犯人が百六十七人。○密賣淫に關係して捕縛になしものが五十三人、其内、賣淫女が二十五人、内、苦役が二罰金が十三人、窩主が十七人、内、苦役が二人、罰金が十五人、媒合容止せしものが十二人、内、苦役が二人、罰金が

十人でござり升 突に此様を奴ッが多い由へお巡査さんのお覺
折へ思ひ申さし升

○西成郡難波村八百十六番地

正月喜兵衛

(五十才)の

悴ハ一人あまども

古目目であり升が

至て分負支に其日送り

に糊口ソソソソて居り

今ハどうもいふも

病の本と成り終小

こきも音目と成りま〜〜が娘と云(十才)

居り〜〜て親兄弟を養ひ

何分女のこと

由へ掛ぐ〜〜行き

ません由へ容察ハ

構へ朝六時より

青物を擔ぎて市中を

賣行きま〜〜天の恵にや

ありけん今頃ハ買手が澤山

出來て毎日十七貫目ござりの

青物を二時頃までには賣りま〜〜

突に感心を娘でハ五座りませんりナント芝居

好の娵さん〜〜此お〜〜と見習かて子ト



以上
大坂
日報

○東京府下浅草元鳥越町
三十番地人カ曳き森本寅吉元五年
ハ六七年前より車曳きと

始はじめが親宗兵衛が借賤の
多おほきを愛いとへ夏なつのひ冬ふゆの夜よの

厭いとひなく朝八時より夜十
時迄あさハ雪ゆきと踏ふと汗あせを

を拭ぬひて稼かせぐこと長ながの

年月としつき一日も怠おこそそむ其身そのみら

半はん纏ちん一枚まいを着きてたゞたゞ親おやハ

長ながき着きせ何なに一いつつ不自由ふじゆうハさせど

親おやの心こころを慰なぐさむるを樂たのむとして

くぐぐ〜りるが餘あまり世よ凡ふつ業ごうを

せせ〜ゆハ躰たいを損こらしたるにや

此程このほどより病やまひの床とこに卧か〜

たるが早はやく全快ぜんかいをせぬと親おやハ

苦勞くろうをりけるとこそこのそらんど

氣きをりんで居ゐると申まをことなるが定さだて

神かみの擁護おごふて直ただに全快ぜんかいとすることなるん

家業けごうハ賤いや〜き車曳くるまひききと其心そのこころハ

錦着にしきと人も及およばぬ孝心こころのなると報知

新聞しんぶんに有ありはし〜が實まことに感心かんしん〜



○綾瀬川山左衛門元大坂北産にて實家の
 今に諸國廻船并に淀川往復の三十百船と
 渡世と云う何不足なく

送りろが兄妹等も
 有とど皆他家へ縁付

山左衛門が相續人なりと

好む道とて力士となり父母の

元を離ること拾四年當時

大關まで取り上り大いに世間小

知ると云うが此程悔悟して何時までも

遊民の部に入り國元に残せし七十有餘年の

両親の心痛を拭んことを歎きまゝに父母に教へもあま

いよく本年ハ力士仲間を外し東京を名残

して阪地小至り本業に立戻ると同業并

愛客へ暇を乞へども人々惜とて許さ

まば餘り我を長向ハ病氣にて

引込にしが長男ハ本年六歳

にちろくことばせめて

此子へ人とせし世上へ

廣く交らせんと昨今

近傍此學子者頼と日夜

學問勉強致させ拾年にも



至^りバ福澤塾の教導を乞ひたき心底にて不日老親の元へ趣き
孝養をせんと決^して左の告别書を諸家へ贈^りたり

僕^ら往^り 歳^の梅^の難^波に甚^く鳴^りて谷^の戸^出一^羽數^萬鳥^も伊^達の森
の鰻^系茂^に潜^り伊^達を閑^鎖を聞^ききて虚空^に羽^を延^び大^鳥の
同^所野^に入^りて負^の五^助力^を忘^れ惠^の王^露相^生の松^の緑^の葉^を
色^替へど猶^も綾^瀨川^の深^き涉^り辛^くも大^洋灘^を凌^ぎ止^ま
を^知る^黄鳥^の訓^へ小^基之^世代^切成^名遂^に退^身に裸^身と覆^つ
土^俵の^名殘^断然^廢スカ業^真正^經紀^歸を以^て從^來念^及願^の
諸^君子^へ只^管謝^し一^奉る

明治九年

綾瀨川山左衛門謹白

よき潮^りひく大^きや天下^晴

俳人 月北木爲山

と決心^{して}歸^郷を積^りて有^り處^が故^郷の兩^親もまご^達者^と
ぢう^と今^歸郷^をる^にも及^ばぬとの文^通もありま^う當^地の^ご
負^の厚^いお勸^めがあるので暫^く歸^郷の念^を止^ま蟻^の
売^町にて米^の仲^買ひを初^め土^俵でな^り相^場所^で五^ヤレ三^カイ
の取^組も三^ツを^押へて無^銃砲^をせずお客^が矢^筈にな^りぬ接^の
門^を掛^て確^りとお世^話をとるはしと報^知新^聞に有^りはし

○第三大區十六小區北堀江三番町邊なる某^方の次^男當^年十
一歳^{なる}小^童が病^死す神^葬式^よし親^類縁^者へつ^もま
なり十六區小^學校^{より}も四五名^の教^師をは^り男子^{生徒}十
四五人も送^拒に立^てが同^區同^校の女^主徒^益田^某の娘^田鶴^江
〔十一歳〕竹^中某^の娘^富久〔十歳〕の兩^人此^噂を聞^き私^等も

送りはしううと且に談合ひ急だ我家へりどりて両親へ志を
 告ると両親へ却つて女子の身にて不用る出過送ふふれよべぬ
 と抑留らまきこまごも両女へさくく不服学校の先生のお話
 に歐羅巴州とやの人の往來で棺車に逢へば見ぞ知らざるの
 人のでも必だ帽子を脱で禮を行ふ又一人も送り人の無イ死
 人の車を見哉まば外國の人でも送葬小立つと例もある
 中々人情の厚濃おと感心を
 りのぞ我國の人も此様に
 有といりのごとと仰せまき
 ことを好う聽ておりま
 する國の異つて人



見ぞ知らぬの人でさへ
 あるに増してや同
 日本の同ト大坂の
 同ト区内は産ま識性
 覺へてより朝夕同ト群小
 遊び同ト學校に昇つて
 同ト學問と親友の
 夜國へ發途を女子なりとて送らねば人間の義務とやが立ま
 せぬ學校へ昇つて居る早髪がごさりませぬと両女とも異口同
 音に雙親を迫り夫々に衣裳を着改へちどしてヤガテ追躡に
 葬式の場所不至りし小説話や支度やで余程暇なりことゆ



最早祭りもこと終り人々引去りて帳場も仕舞跡行付の男入
 のと休息所不残り居りりまば之小向の町人として折角送りには
 いりし不遅刻て如何なる残念でもなく然し致し方無イほど
 小せめて名前を記して行きまうと紙と筆を乞ひて第
 三大區十六小區北郷江一番町益田田鶴江同區竹中端久
 と各自に認めて歸りしが其筆勢の美麗なること

見る人感ぜぬものなく何んとマア十歳や十一の
 小女子で有りながら見識といひ論辨と
 つひ精神といひ技藝といひ此様小
 確乎だといひ實小天晴感心後生
 可恐といひ此子等のこと五座り

まを志すこきといふも學校の教員月が
 善良々のこと是ふつけても世間
 の中等以下の父兄貧乏人の
 子弟ハ學校へ上ることハ無イの
 學問ぢんとさせると却つて
 生意氣小ぢると頑愚口
 舌を言はざふ子弟が
 あら一日も早く學校へ
 上がるが良うおまを此府下
 はハソナア阿房あや兄ハ無イ
 うも知まぬりまどもト浪花

新聞に有り



○能優若女形阪東志うか〔元中村の母〕
ハ阪東三津五郎死去の後同人養子と

なりしが本年六十五歳にちる養祖

母〔故人三津五郎の実母先故志うかの

妻〕に孝養を盡して怠ること

なし然るに三津五郎存生中に

を置き置たる借賎千圓餘を

同人死去の後に出来たる

借賎が千八百圓合して

二千八百圓餘の負債あるを知らばに

つとめが近頃追々

債主より督促さるにつま

始めて是を知るといども

只今此場合にても

迎も返すべき

手術つらぬば

身代限り

差出をより外

なしといへども老

年に及びる養祖母を

家無にして艱苦を爲せてハ

此上もなき不孝なりとて

ツギ

雀子所月



深く憂ひに沈み自分債主の許へ往て右の次第を演
 べ涙を流して歎願せしる總債主三十六名ともに
 家業づくりに似合ざる志の程を感と以後の劇場興行
 の時々おその金主より請取る給金の中無利足に
 追々返済に及ぶべしとこと極りし全く老祖母に
 孝行の徳澤孝行の三字よ誰しもぐんにやりさせし
 き升

東京女新聞

○此程湯舎で若衣がらんをド一を發聲て居るを聞はし
 からチキッド

「去たうとも泣去にとも落婦 婦婦のふくごにのろま容
 圓いもの授りや竹は彼は直に転ぶよ廊の猶

明治九年第五月十五日ヨリ一月毎三号出版

十五日 發兌
十五日

大阪府下

第五區十一小區

新町通一丁目廿二番地

編輯印刷兼 八尾徳造

第一區十四小區

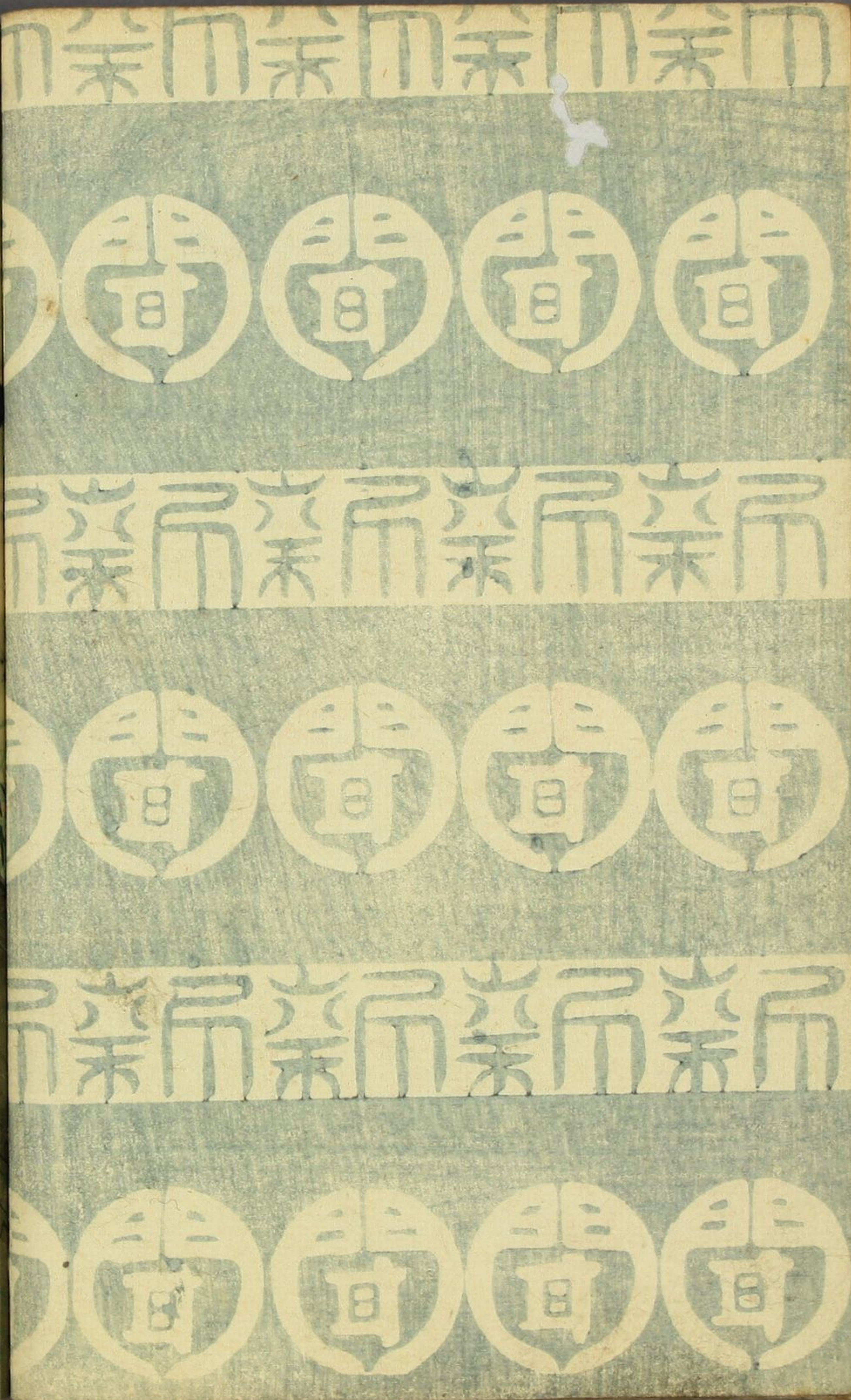
道頓町三丁目一番地

出版人 新惣三島

新聞 實 確 解 禹

四
號

第
四
號



明治九年第三月十二日
官許

官許

確實画解新聞

明治九年
六月十五日

○當一月より五月まで府廳々々巡査へ賜りたる賞典
ハ人員九十人にて三百三十五圓六十五錢又人民へ賜りたる
惣高ハ二百十二人にて三百九十三圓三十三錢でありしと
此様にハ賞典を頂戴するような奇特なる人の澤山出來るへ
まことに有りがききことで有り也

○本月八日午後六時頃阿波座一番町辺を十二三ヤば
かりの男こども童さかが脊せき籠かごを肩かたにかつぎさき身みくく鱈たらのはし
身みと聲こゑをあげて賣うり歩あきまし不ふ圖と小こ石いしにつまづ
きて籠かごと一いっ緒しょにひひづづりかかへりり拍ひ子こにささし身みが中ちゆう々

バラ／＼と飛出ると
 近隣の犬が吠きくと
 尾をふりて駆け
 来りまゝとく
 間にベロリ／＼と
 喰てーまひはし
 とを見るより
 男子はおろ／＼おまゝ
 此なり歸まばお爺さんに
 まゝまゝどか／＼とよろうと
 うろ／＼せ／＼とところへ同區同町の



新井久兵衛とてか称て慈悲深い
 人々通り／＼りて其
 さし身の價を問ひ
 三十二錢を投出して
 遣りまゝ／＼と小童
 なま／＼大地へひま
 伏し百拜頭
 言／＼と
 歸りて
 側小見て居る人々まで其俠氣に感心ししことぞ



○ちうくは、のめぐみもふりき
こかへて、ほとけのちうくいたの
もしきうを、順礼の五奉りや
お祈りひかり外とおとちうく撃を

開くよりも入口

ガラリとむき

あまて出る

ハ此家の

花嫁にて



十七八のうら若き

いと美しき両の眼

もろろの涙をぬぐい

つ、緋に懸糸はし錢

持ち出でア、

順礼さんお前ハ

廣く諸々方々を廻るめの



昔一や年頃五十むよりせころいふ顔でふり子人小逢
あさやうなま
朝夕泣うぬ日とていぢうく 万一コト不意を最期ハぢまうぬり
と家出せうより其日を以て忌日とせし 追善供養を

して暮りまるとかちぢむと
 子言まへとととまじくと
 頼む其人を如何なるものかと
 尋ねるに大分縣下玉來村
 後藤惠美作の娘さおにて
 二戈のとくに母ふハナと
 の時に又惠美作の家出を
 叔女の詩にてやりく成人
 志しりしが今年
 目村首藤作三に
 りいきて夫婦と



なりヤレ嬢しやと
 思ふにつけ兎角親の
 事を想像り六部
 順礼の来るごとに
 米や錢を施行してねんご後
 頼じもぞ天も其孝心を
 憐み玉ひしにや此頃
 紀州にてはちぐとく
 して居ると風の便りに聞
 へふさわい大に悦び勇と夫と
 作三と同伴にてるく紀州より連

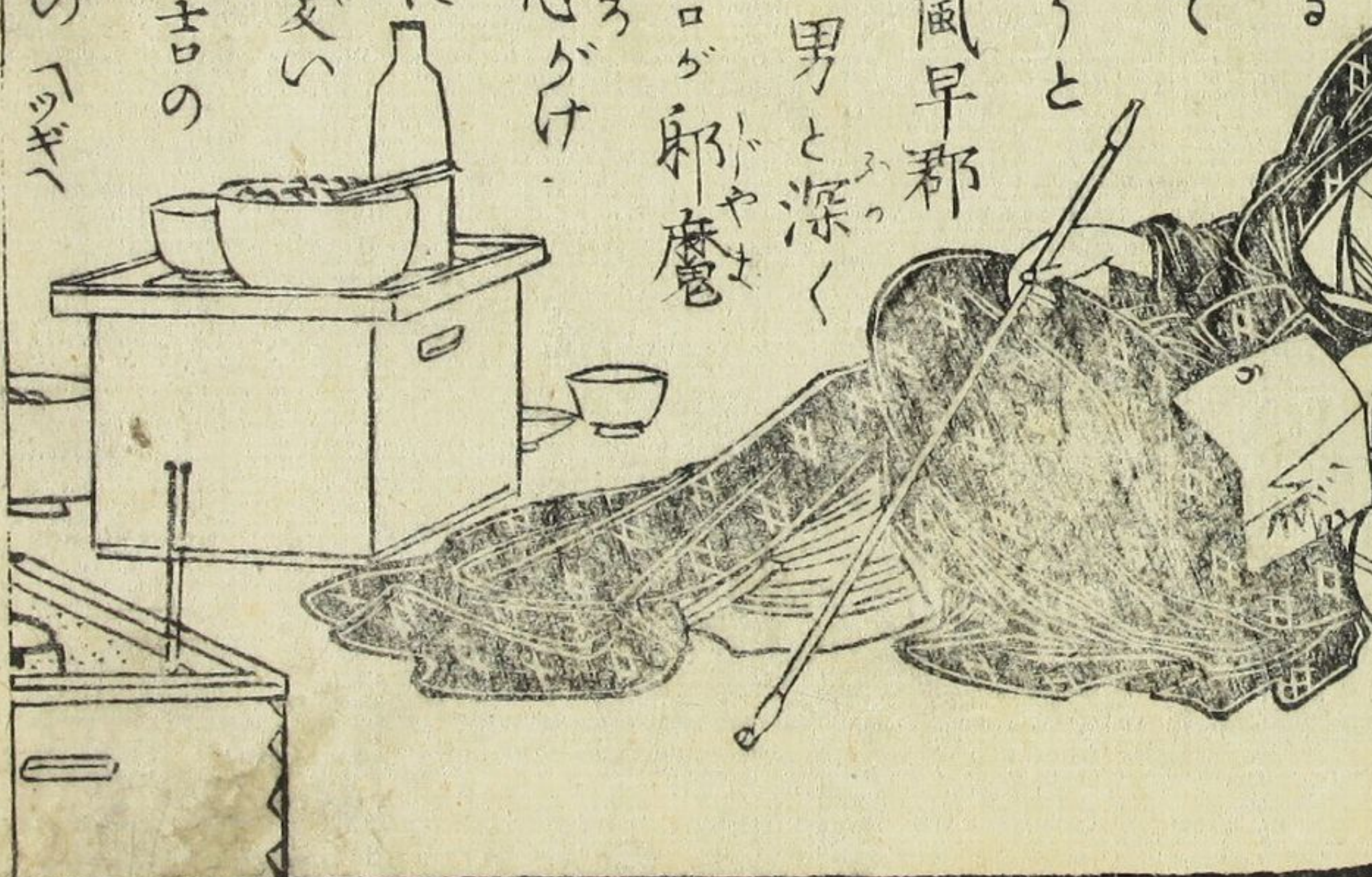


歸り十分の孝養を盡して居と申事であり升が実小近
來らんを孝行もの稀で五座り升
(以上大坂日報)

○伊豫の國伊豫郡中吾村産ま
篠崎お栄といふ女へ六年
に近村の音五郎へ嫁入り
して程なく懐妊の
お腹の大きい中で常五郎と
いふものと密夫をして追出
さまその男と一所に家を
逃げ出—其のち産ま



赤子を春吉と名をつけて云月てる
うちに又この常五郎にも倦きて
今ハ仕方がなくどりしと宜かりくと
春吉を抱て迷ふて居つりしが風早郡
怒和村の木挽初藏に逢ひ又此男と深く
なりそきと三戈になる彼の春吉が郎魔
になりどうぐ—て殺—といと心げ
跡月二日に浮穴郡野尻村の際に
ある池へ春吉を連ゆき男が可愛
はかりに我腹をいこめて産ど春吉の
袂へ石を入き罪もない子供を池のツギへ



逆巻水へ投こんで是々の獨り身で初さんと思ふまゝに成る
こいで喜こんで君とのを池へ赤兒の死骸が浮くといふ評判
うかぎつぎまでお糸も初藏も召とらまはしとがナントマア
恐ろしい女でハ有りませんり

○三洲池鯉鮓宿の橋本友吉ハ今年九才にちる米吉と
いふ息子を連れて横濱見物に出かけ戸部町二丁目の抜浦
萬次郎の家へ泊り先月二十八日に急用ができて陸奥氣で
東京へ出る跡で九ツ小ぢりる

米吉が親父の居あいを探し
大々國へ歸つたので有ふと
子供心に思ひこと天保錢

二枚もって萬治島の家
をかき出し親父を
探し程ヶ谷へゆき
そとと藤沢左の
鴨沼村までゆき
山下亀次郎と
いふ菓子屋の前で
私の親父へこゝを通り
まゝと尋る様子さまざまといふ
子供で何う子細が有るやいなや亀次郎
夫婦が呼入てごんく様子ときくと親父をさがしに来る



ので三州までゆく積りどといふので亀次郎夫婦の
 大い小敬馬き取敢む其筋へ
 届けて兎も角も亀次郎が
 預る事になり夫婦が至極
 可愛がって置と戸部町の
 救浦でハ米吉が見へないとして
 大心配諸方へ手に分て
 探し其うち友吉
 も東京より横濱へ
 歸つて是をきくと又驚き
 いろいろ苦勞をうけているうちに



東海道へ探しに出るとあが鶴沼村の
 葉子屋に居ると注進しこので一同
 大い喜び早速人を出して
 引くることにし「まー」が
 そこの子供で無心の葉子屋で可愛
 がらまで居るものぞ横濱へ歸るのも
 三州へ歸るのも否ど此家のおぢさんや
 おむさんの傍に居ると言ふて泣けへ
 よんどころなく夫でハ友吉が國へ歸るまで
 預つて下さき必だ立寄つてお礼もヤ米吉も引くと
 不事になりはし「が妙なことが世間ハ有るもの



○是は極めつじい
強淫の一件が有り

まうと所は東京浅州森田町

一番地の湯屋へ新福富町

二十九番地金井常次郎の

同居人高橋おみのと養

女お若といふ十一になる娘を

雇に出しておくと湯屋の亭主

國太郎が先月廿四日の夜に

一杯きざん歸り頓てお若を

我が寐床へ連れて来て大變を

事を始め傍に寐て居と女房

おふせも共に手傳ふて足を

持ッヤ手を持ッヤとろく

其夜の事が濟と翌朝お若の

かけ出して七きと訴へに

お若の陰門を少し怪我を

して大きに苦しむ國太郎の

送るま女房の差配人へ

あづけおなりほしと女房

が手傳ふとのに右今めづし

ござりません (以上讀賣新聞)



○先月廿七八日頃鎮臺炮兵支廳の大炮四斤ホー三十七八貫目筒を二挺盗取し一た賊ハ鳴野村此者にて同類もこまぢうく只一人して二挺擔ぎ出し一ま一こが此者ハ平生ハ評判の大力よて大炮ハ地金に一ハ斬家の金新(賣拂)其後又金新來ていふに此項已身のことを探索ハ來ぢうんと若せんをうつろいでも有る一兩日のうちに來るふぢいのであせてくまよて歸り由(金新も不審に思ひ此後來る其筋(訴)んと待居(に)に果て來はしと由(早速)此由警察所(届出)が鎮臺の係ぢよと直よ彼方(お抵合)にぢうり鎮臺のお吏とお立會の上にて捕縛れましたとの風説猶くハハ浪花新聞に出て有リ升ナント剛偽ナ盜的トヤ有リませんク

明治九年第五月十五日ヨリ一ヶ月毎三号出版

十五日 廿五日 發兌

大阪府下

第三大區十小區

新町通一丁目廿二番地

編輯印刷兼 八尾徳造

第一大區十四小區

道徳町三丁目一番地

出版人 新惣三島

新 實 確 解 聞

第五號



竹本 魚



明治九年第三月十二日
官許

官許 確實画解新聞

明治九年
六月廿九日

○當府廳より修身論其他書物を多く御買入に於て
囚獄場へ差入る囚人に讀せておやりなされとのよし
囚獄人にもかくまでお恵とくごさるとい有るごい事で
ありません

○第三大區八小區一等戸長新井久兵衛さんへ此とび
第二大區十三小區小學分校の貧民生徒へ石板百枚を惠
ましますことのこと誠に奇特なお志

○第二大區心齋橋二丁目廿二番地橋本清兵衛の娘たる
(十四才)ハ洋書をよく讀み其上に通辨をのびますゆへ
女の洋人も懇意にのびし近頃月給を貰ひ洋人に雇せ

又妹の梅(五才)も姉の教込みにて單語をよく
 覺へこんで居りまはし實に姉妹とも類ひ珍じき女で
 有り升

○戲謔にも程が有まをかねるを悪洒落を事へるもの
 での有ませぬ此間も

九郎右エ門町の
 或る金満家の
 權妻小梅が
 淋しきうに
 柱に倚りわり三絃の
 爪弾ふ氣をなぐさむら
 折々に其友達の駒吉と



難波新地中村屋抱妓がにろくそ
 大平腕に何う旨い物がはいつて
 有そふなのを手に持て
 是のあまり麗末の品なきども
 且那がお出をさつて
 とさし出はしは是ハア有が
 とふと受とりて椀の蓋が頻りに動きま
 ぐへ蓋を取り出す
 きぢ雀が
 三羽
 飛出
 小梅の
 吃驚
 其儘
 暫時
 氣絶
 志はし
 其翌々日
 療養中
 ドやとの事
 お氣のどくな



夫婦喧嘩に花が咲き大變を騒動を仕でりしはしとつ子おんをし可の

第二大區十一小區鍛冶屋所筋清水町

にて手傳職の頭領井筒勘兵衛の

妻のたけと揃ひも揃ひ一意氣を夫

婦と評判さきし人なりしが先達て

身代限を為せしより勘兵衛の夜遊を

たどめ家に居ること稀なる由へたけの

女心の浅なるにもコリヤテツキリ女狂ひに

相違なりと思ひつら屢々嫉妬

喧嘩を致しておりしはしとが本月

十三日午前一時頃トラックグッタク

グワラ〜と劇き物

音をさせ果のキヤ〜と一聲

さげび〜め隣りの樽屋

が戸をこども明て

もせ付見ると夫婦

互に血〜と後ふなり

滅多矢多羅に切合て數ヶ所の

深疵に堪ざりしにやバツタリ該所

へ打たをさ若るしむらうに査公も

數名お出にせり勘兵衛の病院へたけの

警察所へ送らるしとことや〜とマア

嫉妬ほど恐〜いものなりません怖やの

以上
大坂
日報

研實新聞

五

八



○小夜更てハツクセツク明六ツク時刻の
 耽とらるる多ど金ガ款の世の中とてあはまら
 ことう浅間くく西京の子本通り東

嶋原の南なる丹波街道に於て
 葛野郡西七條村の西村伊三郎三打が
 其恩義ある友達山分宗助(四十)を
 むざんにも犢鼻褌を以て縊殺し

所持の金百拾七円を奪取する
 始末を聞くに兩人平生心安く

交りて當三月中旬
 よし打連と立て

丹波路へ商業に

出行の事
 果て歸路
 大江坂峠に
 て一酌一猶伊三
 郎が家に伴はせ
 又々旅勞きを慰んと
 再酌に及びしが今宵に限る
 命とも知らず酌交宗助の
 強らるる儘又痛く飲を續け
 心地も宜げに是より嶋原に
 遊びて命の洗濯せんと暇を
 告て獨り出行足元も踏々



跟々踏留^{ふしとど}ぬを伊三郎^{いさぶろう}の心中^{こころ}に左も社^{やしろ}と點頭^{うづめづき}つ、遣違^{やりちが}へて跡^{あと}追^お掛^かけ此^{こゝ}殘^{ざん}虐^{ぎやく}に及び命^{いのち}の洗濯^{せんたく}此^{こゝ}所^{ところ}ふてせよと石^{いし}を結^{むす}付^け野中^{のちゆう}の井^い戸^どへ井^いり^どと素^そ知^しらぬ顔^{かほ}して居^ゐたりしが宗助^{むねすけ}が家^{いへ}にの夢^{ゆめ}にも知^しらぬ久^{ひさ}しく音^ね信^{しん}ぢきを案^{あん}とて諸^{しよ}所^{ところ}さか^かが^が求^{もと}むると雖^{いへ}ども終^{つひ}小^こ行^{ゆく}衛^ゑの知^しまざるより家^{いへ}出^での届^{とど}きを出^でせよ伊三郎^{いさぶろう}の首^{くび}尾^びよく仕^しらぬしつゝ思^{おも}ふもの、若^もし彼の死^し骸^{がい}の浮^う出^でて八^{やち}目^めのから事^{こと}ありての由^{よし}々々^{々々}き大^{おほ}事^{こと}と心^{こゝろ}付^けき四月^{しがつ}十六^{じゅうろく}日の夜^よとざく^く行^{ゆく}きて井^い戸^どの内^{うち}を覗^{のぞ}けが案^{あん}に違^{ちが}ひもあふんと覺^{おぼ}しき石^{いし}を投^なげ入^いり立^た去^さりたり然^{しか}るに此^{こゝ}伊三郎^{いさぶろう}なるもの元^{もと}來^{きた}性^{せい}根^{こん}

極^{ごく}惡^{あく}しき者^{もの}にて子^こ供^ご三^{さん}人^{にん}も持^もちて博^{はく}奕^{やく}の爲^{ため}め家^{いへ}産^{さん}を傾^{かたむ}け

宗助^{むねすけ}より兼^{かね}て五十^{ごじゅう}圓^{げん}も借^かりて漸^{やうや}く所^{ところ}々^{々々}の負^{おん}債^{ざい}をも償^{つぐな}ひ上^{かみ}恩^{おん}に報^{むか}ゆるに仇^{あだ}を以^{もつ}て取^と得^とり

賤^{せん}も瞬^{まは}間^まふ八十^{はちじゅう}圓^{げん}打^{うち}負^{つけ}残^{のこ}るハッギ





夫々仕拂

たまバ

今の如何とも詮方なく

始て後日が怖しく進も助るぬ身の

人手にぐらんより自ら死するに如すと

思案一去月廿六日夜挂川へ身を投一に料なき

村人小助けらまは巡査の屯所小牽れ一今の

包むも由なく一是迄の悪行逐一其状に及ひしりとぞ

○山口縣下阿字須村の

岩井七五郎と云神榮丸

の船頭が去月上旬備後鞆

港へ着き二人の水夫に用を

一言、付陸へ上げた留守の間に

細縄で

自分の體を

帆柱に縛りサモ

苦ししい顔と

して居ると

やがて二人が

口へ



碓氷新傳

歸り來て

警馬きたる親方

どうやさいはしと

午前達遅遅りつ

早く此縄を解

て呉ま今れさき

強盗が斯くと虚

喝をせし近取

の警察所へ訴

へ一巡査が

一應お調べさ

ると彼の七五郎

かつに今口

午後八時とろ

水夫共の留守

を見こき荒

五

くま男が五人にて私を縛り付在金を渡せば一命の助けると
 申升たで所持の四百圓を渡し升と帆網も櫓楫も打碎
 いて逃て仕舞いまし〜と陳る言葉の揃はざるやへ不審をか
 けしと押しと問はるゝと今云ふこのハ残りだ嘘で實の金主
 の金を三百圓程遣込んどで巡査を欺して漆状をももふ
 金主を欺く心組であつ〜と知きて本縣へ船共に送り
 ちる途中で巡査のやどんを見らるゝ海中へ飛込んで
 跡白浪と逃失せま〜と

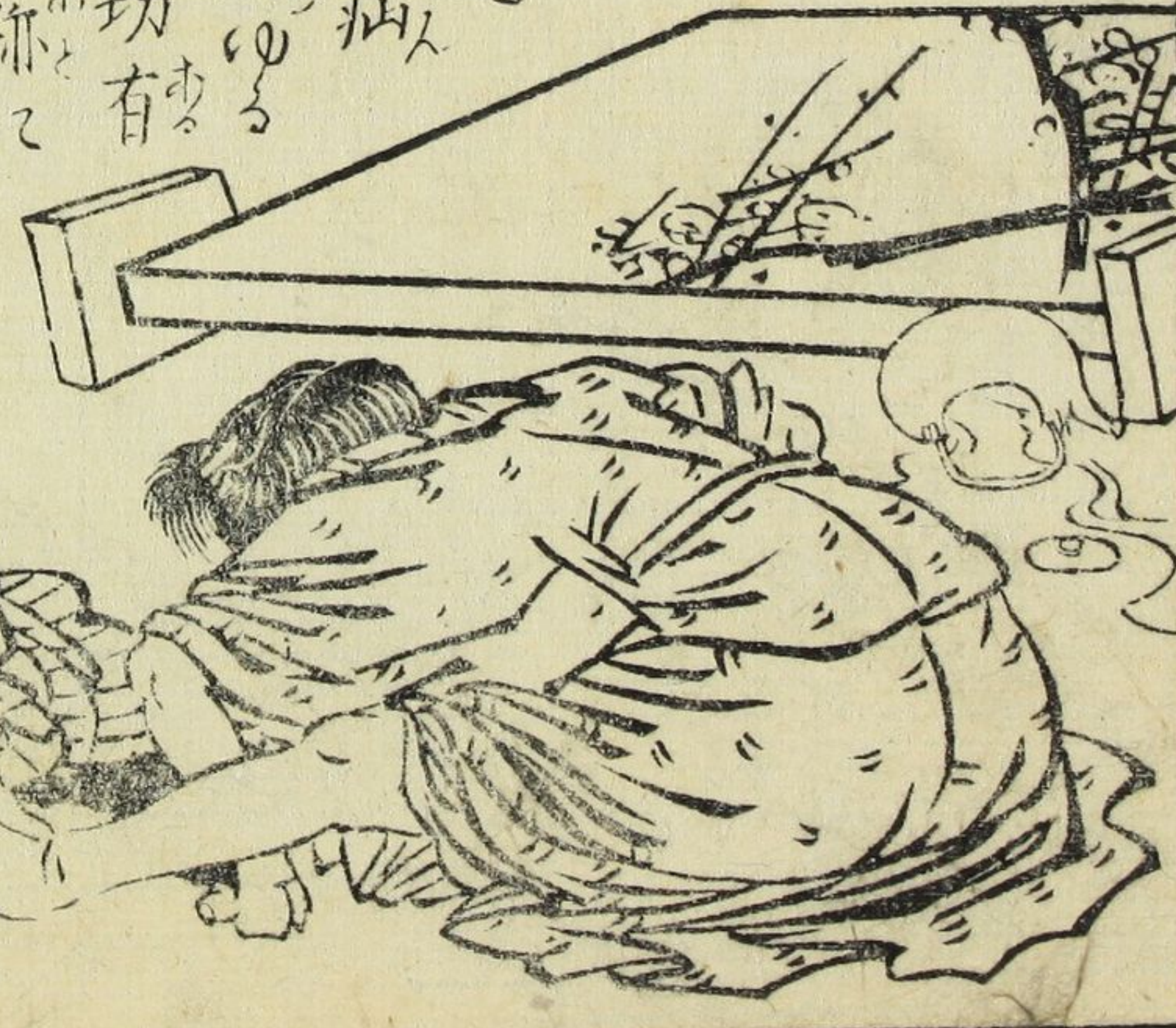
(以上 報知新聞)

○難波新地中筋三榮店鶴子とて十三年八月に女
 舞子さんハ幼さいときより兩親の心に背くが友達と
 交しても争合といふことちりく亦讀書算術洋學迄
 も勉強して父よりも平生教を授け毎日怠りなく誓古

を一勵し朝や
 えや起て
 父母
 に向
 ひ懇
 勤不挨拶
 行義立振舞迄
 亦線香をうらぬ日一問に籠りて
 只獨り學問をしてゐるとかりこと
 ニヤンと小猫チヤン達むらでハ無い
 野樂猫も破意猫夫多間多猫も
 無智猫も身化猫も人を馬鹿に
 するむらりガ能でハなほ些とらんを子を見習ナサイ



○三重縣下伊勢の國鈴鹿郡高宮村農十左衛門といへる者ハ兼て痴病に悩みいろくくと手と盡すといへどもさうに其甲斐なく然るに去月同村の懇意なるもの見舞うべく來りていふに痴氣にハ櫛の根を煎じて用ゆるときハ極妙藥にて至て昂切有とのよしと咄して歸り跡にて十左衛門ハ何ダカ痛されたる折ぐりなまきべ早速妻に言付櫛の



根を掘りに遣り持歸やいそ其儘煎じて直に飲みて妻も何心なく一パイ飲之又十左衛門の弟の嫁も居合てついで少し少く腰が痛まを由へ煎じて残りをくまひと身ノ害とるといつゆあつたを飲之終りたる三人が暫時の間七轉八倒四苦八苦おびとぐと吐血を此有様小隣家のくぐらせつけ醫者よ藥と介抱に嫁と妻といふ少くと命むらりら



助りしと憐むべき十左衛門に終に冥途の人となり
 と彼の地より報知有りたりとガナント舊習をお
 方々此様を事有升やへ病とさへ名付と早速
 名醫師先生お頼となさまのなりと素人細工や
 藪細工で貴重の命を捧に振ってやうませんせ五養
 身五用心まじびせむらりていなる舊弊有り升
 病人に薬を用ひず五神水どのお供水どの呪いど
 のお加持どのといふ人々有れども決してせんを事
 での病の治りません何國も病院有り升々愚を
 となさぬや又幼子にも熱せぬ木の突音梅のや
 花の生りもの類の喰はせませぬツシテ餘や菓子
 にも粉色して有のよりく氣をお付ナサイ毒繪具有り升カラ

明治九年第五月十五日ヨリ一ヶ月毎三号出版

十五日 發兌
十五日

大阪府下

第三區十小區

新町通一丁目廿二番地

編輯印刷兼 八尾徳造

第一大區十四小區

道徳町二丁目一番地

出版人 新物三島

解禹實確

新聞

第六号

叶吉海魚



明治九年第三月十二日
官許

官許 確實画解新聞

明治九年
七月五日

第六号

○去月大阪師範學校附屬の小學におゐて下等卒業の免狀を得らした書生さんハ左の通りで五座り外下等小學二級卒業生十三人の内で水野元正さん二十五歳が誠驗優等に付勸善雜誌を頂戴し、同第三級卒業生二十人の内で作間忠一さん廿二が同斷第四級卒業生十七人の内で生田房内さん廿三歳も同斷第五級卒業生二十二人の内で藤原重太郎さん廿九歳が習字臨本、第六級卒業生六十一人の内で河野鹿三さん廿深田基吉さん

二十二年が同断第七級卒業生廿四人の内で後藤幾太郎さん廿七歳教訓書第八級卒業生廿一人の内で大出こは娘さん廿七歳も同断以上百九十八人の卒業であり升エラリ

○サアく皆さん幼くても中く大人まさりの子供が出て来はしと第六大區三小區大道町大崎

重松(本年)

六(五)の親

父ハ桶職

にて一日に

十五錢の儲も



覺束なく細不七と其日

を送りて居りま

悴の重松ハ生質

惻恰にして孝心深

く始終親の厄介に

たりてハ濟はぬと

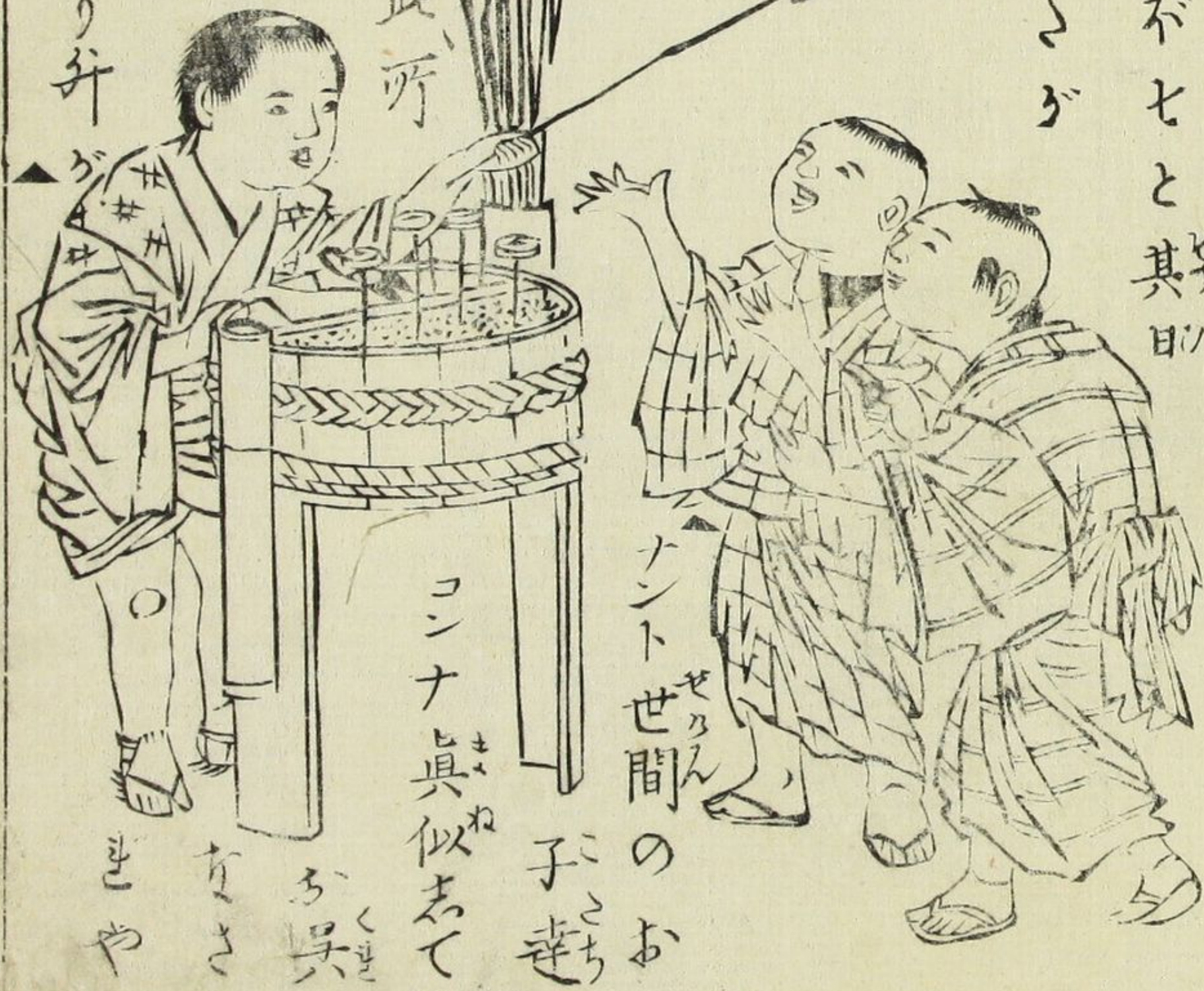
思ひ館を

受て来て毎日

彼所と賣行き一日

以親父の儲る位ハ

尻ともなく儲て歸り并



ナント世間のお

子達

コナ真似去て

お呉

なさ

さや

泉の國岸和
田の木村愛
信といふ
人にい

○堺
縣下和



十七才
を頭と
して二男二女有
外分揃ひも揃ふて
四人とも性質
温厚にして
兩親へ
孝道を
盡し生きて以降兄弟
喧嘩扱へ更にあたこと
はなく最と睦まじく暮せ



不幸なるかを家貧しく志て其日の烟も揚葉しが母親の夫を若にして終に難病に煩い付き困しと悩んで居さきども固より貧若にて醫師を迎ふ資力をなく四人の兄弟に見兼て朝の六時より晩の七時までの薪木を賣行きて母の藥代とせし夜の晝の疲勞も厭むして母の側に所き添ひ按摩から藥の世話まで何一ツ抜目なく大切に看病を志しているところをこと實に憐まじ中にて感心をなせしで有り升

(以上 大坂 日報)

○東京西の久保町六番地の豆腐屋お梅の家へ
去月廿日頃麹町平川町二丁目の豆腐屋の婆々

おえつが
来てハイ
五免ガ
私ハ今年五十
三にならるが奉公
人を他の家へどは
つて取らきとのい
マ始めてナンデ断りも
なく此所に居る菊治郎
を使つて居るのだと大聲あげて
どらけの顔へ筋を出して怒り出まに



お梅の何ごう寐車に水で洗しもわらわら私の家でいお前さんの奉公人も知らずに使つたがときがどふしこので有井といへばおえつはなをも聲あはげぶしと譯もな人もんご此



菊治郎の私の大事に奉公人で娘の聲に志といと此間と相談中とに馬鹿くしいサア

私と一所に廻所へ歸りなと菊治郎の年を取って出やうとをるゆへお梅の息子の太そふちとて此婆々め其分でのをかたないと打擲とるゆへおえつのかけ出して分署へ訴へ夫うごんく



様子を見せと
おえつは表向
娘の聲に志と
いといへども
内心は自分
亭主同様

可愛がりといと思つて居よのを菊治郎へあんな
 可憐々へ否ごとて鞠町を出て西の久保へ來て
 働いて居よのを聞ておえの婆々が血道あつ
 ことなりこんど譯で一日も菊治郎の顔を見ず
 への居らせをひと言出し未の差配人へ引渡し
 になすのの否でございませとすどうぞ菊治郎へ手
 渡しにして下さいませと言つといふがナントマア
 五十三にも成つて聲をとる程の娘も有なぐら

○盗賊が廢刀の
 御布令ヲ守ツと

といふ話しい
 去月十九日
 に相州鎌倉
 郡植木村の龍宝寺へはいつて
 盜賊の和尚さんと其外二人を
 縛り臺所の摺子木を持來りサア
 聲を出ると是どぞよといふて
 金や着物を
 持てゆき
 ましととて



○どんを亂暴
を奴でも物の
道理より



去月に
ふにい
とい
せせ
せん
れま
勝
道

十二日に

東京浅州

山谷町にて彼の

悪口仲間の無利勸

めが例の旦那お供を

致しまあやう歸り車

が有り外とい

ふのを客が

断ると夫

りら人カ

曳が悪口を



いひ出し仲間

が寄ってそのお

客の

胸くらを

取って打擲を

るとき

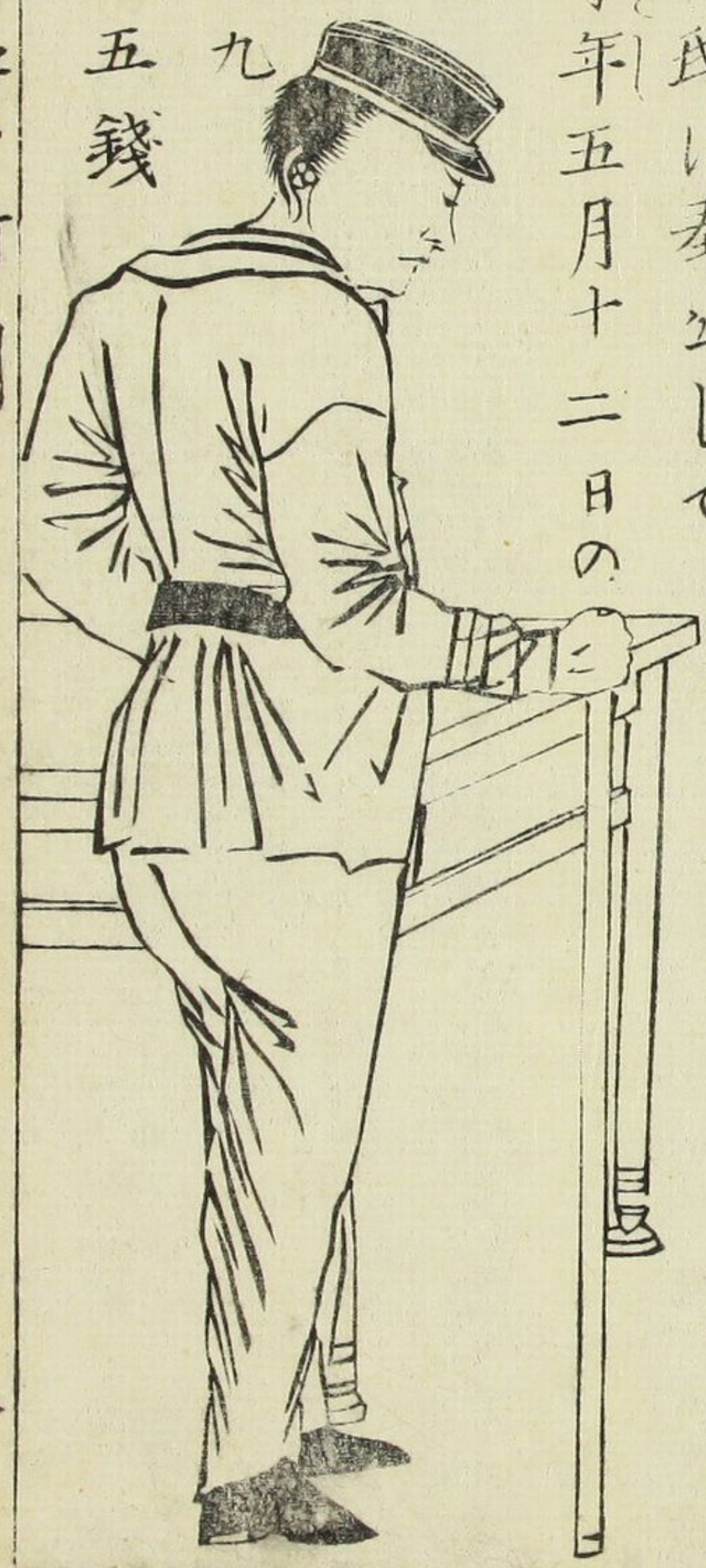
に通

千住

ツギ

南組の村松勝治郎の女房おぶんが女をぐぐも
 其中へたちいりお前ぐぐもくもめるのさ
 へお禁制どり知ッておいでり物の話して理非
 がこりるものど何んで其様に一人の男を大勢
 で打擲をるのどそんを不法なり私がお相手に
 成りうア羊でも出せるぢら出してごらんと理
 道を一言に車曳の野郎とも驚いて其場の立
 こりまほしとが實におぶん天晴感心てまに
 ひきりへ車夫どもの了簡ハナント罽玉の有る男
 とちとの思ひまほせん
 ○去月二十六日東京二方面一署

来々娘ハ年が十四と二ヶ月で
 小石川原町二十番地の星野
 金平の養女お梅にて何の
 用で来々と尋ぬると私ハ
 去年より裏霞が関の堀川
 さぬの邸に奉公して
 居り今年五月十二日の
 念人に
 殿様の
 お金を九
 百六十五錢



ぬき出し其時ハ散髪さんぱりの盗賊どろがうがいぬにげまし
 こと私わたしが中なかつこので今日けふまで誰たれも私わたしが盗ぬすんどと
 氣きが附つものハ有りぬせんが側そばを勤つとめて居
 るので取とお金を遣つふ事が出来できず持もて居ても
 仕方しかたが有ありません故ゆゑ中なかつ上に來きはし此こ金かねがほし
 成なこの奥おくへ呉服屋こふやくが帶地おびを持もて來きはして夫つまが
 欲ほさに盗ぬすいゆしと隠かくさど中なかつましとが下女げにょハ
 下女げにょどけの分限ぶんげんを守まもればこんか不ふ了りょう簡かんハ出では
 をぬいがすべて身分過あまる物を欲ほかる故ゆゑこんか
 悪わるい心こころが出來きて人ひとハ萬事ばんじ身分相あ應へいといふ事を
 考かんがへねばなりませんつゝ志こころむじく
 (以上續讀新聞)

明治九年第五月十五日ヨリ一月毎三号出版

十五日
十五日
十五日
發兌

大阪府下

第三區十小區

新町通一丁目廿二番地

編輯印刷兼 八尾徳造

第一大區十四小區

道徳町二丁目一番地

出版人 新物三島

新解画確家

第七号



新解画



緒言

方今世ニ新聞紙ナルモノ有テ勸善懲惡ノ具トナルハ之ニ如クハナシト雖モ惜ムラクハ真片假名ノ文字モ解セザルモノアリ或ハ假名ヲ讀モ其意未ヲ知ラザルノ遺憾ナキニシモアラズ故ニ該新聞ノ如キハ廣ク各社ノ新聞ヲ參考ノ其讀難キ文字ハ假名ヲ加ル而已ナラズ兒女子モ解シ易カラシガ爲ニ稗史ノ体裁ニ倣ヒ画圖ヲ加フ冀クハ江湖ノ婦女子之ヲ一覽メ知識ヲ廣メ共ニ開明ノ門ニ入ランコトヲ

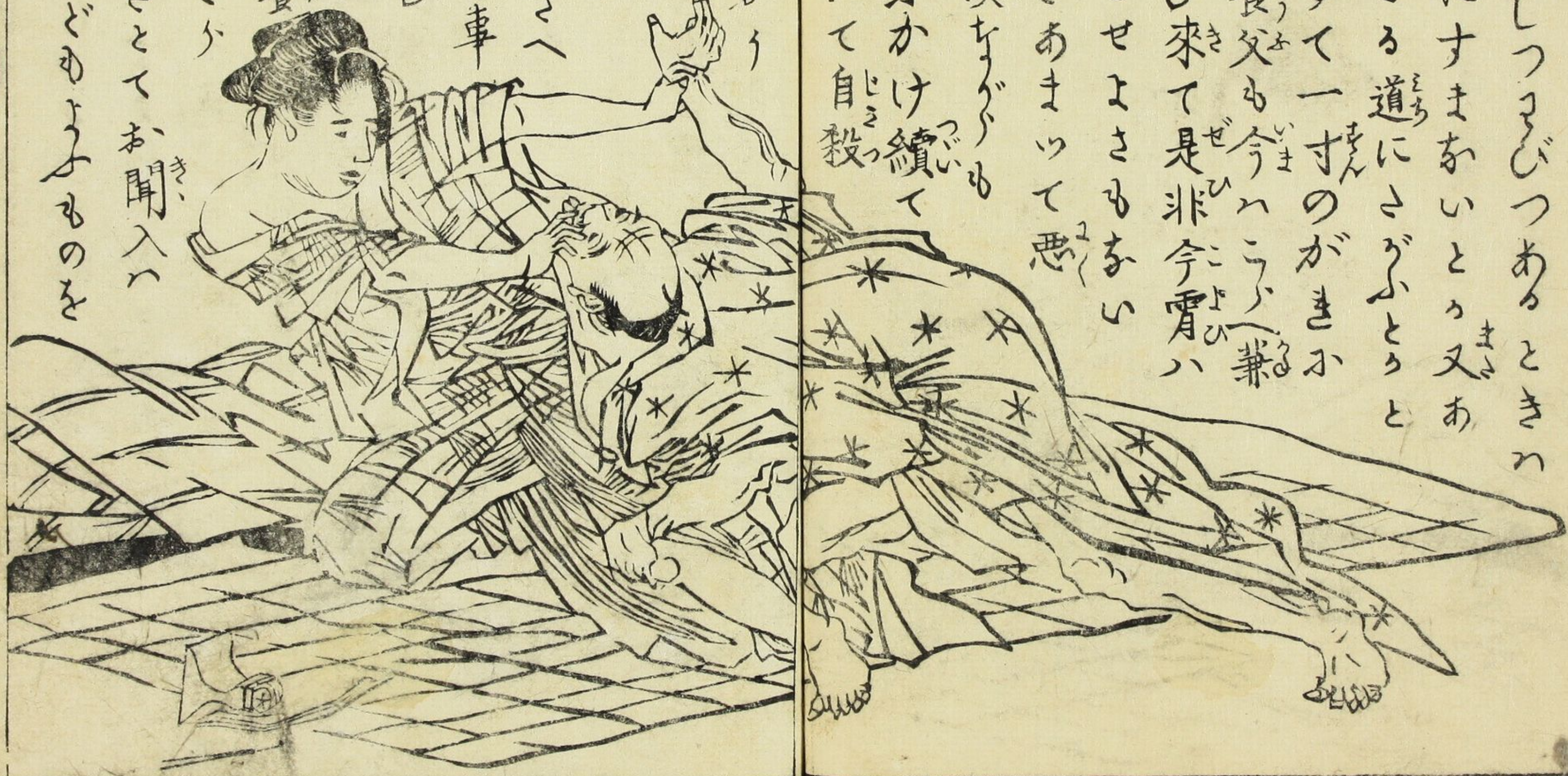


官許 確實画解新聞

○三重縣下大部田村三谷區平さん此養女もよひむすめい志いし（十九年）ハ幼少こしょうのときより津の藤枝町のアル女おんな郎屋らうやの抱かかへの藝者げいしやとをりさりし去さる六年十一月とせんとし解放とくぱいの際ときより養家やうかの三谷みやりさへかへり居ゐりし鄙び鄙びのいままを顔かほかさちまど其そのうへに幼こをいうちりら入いの氣きをとりあぐさめしつと免めんをせし不ふど有あて愛敬あいけいれまぼる、バウりの面影おもかげにあぐりやうこと、情なさけを養父おや區平くへいダ思おもひぢめ間まがを隙すきがを目めをもてあぐせ口くちもていどむいやしさを父ちちと名なのつく人ひとありとおもへばい志いしはお

ござらにすけしつこびつあるとき
 お養母さんにすまあいとく又あ
 るときの人さる道にさぶとくと
 云ひかこつきて一寸のがまほ
 のぐましが養父も今いこう一業
 て聞中へ忍び来て是非今宵ハ
 思ひをとげさせよさもない
 ときの可愛さあまつて悪
 さが百倍不便ぢがらも
 ちあゝを手おかけ續て
 こしも此場にて自殺

せんといやおう
 云さぬ半詰
 の語に以志の
 今さかいつへさへ
 かくより外の車
 ぞぞく志むし
 涙にくまらるが
 心を定めて養
 父に向ひ今さか
 とやかふりごとてお聞入の
 あるまいなまどものようものを



思ふてもよやあやんせかりにも親子と名のつ
 く間に訊ぐ出来てはあなたのこりお母さんまで
 此外聞にもかゝる事とハハハ幼き其時より
 人並にならぬ迄もみ
 んふおちる此五思
 をまべとんを事でも
 否とハハハけきど
 こまバツウりのおゆし
 と涙ぢぢぢにかきくどけ
 ども區平ハハハに耳
 にもかまむを再び

娘に云やう
 ハ其言訊
 ハさる事
 ぢぢぢかく逆



思ひこじ上々ハ一夜をりとも枕をかゝして呆まばは
 否と云をささき此とかり死ぬより外の事ハおいと
 くりウへしとる志がこよとじさへうまで娘のい志ハ何と
 返答をすやその次号を讀て知りたすへ
 ○三瀨縣下第四大區柳川に住る士族十時清之助
 の妾おちあハ同藩の士族の娘なるが先年清之助が
 死去せし後より貞節を守りて一子勇太郎(五年二月)

を養育し昨年四月より柳川

傳習小學へ入校させ兩

風寒暑のいとひなく

勇太郎を脊おひ日々

十五丁餘の行程を

往返し我子の授業

の時ふハ自り

講堂の端に在て

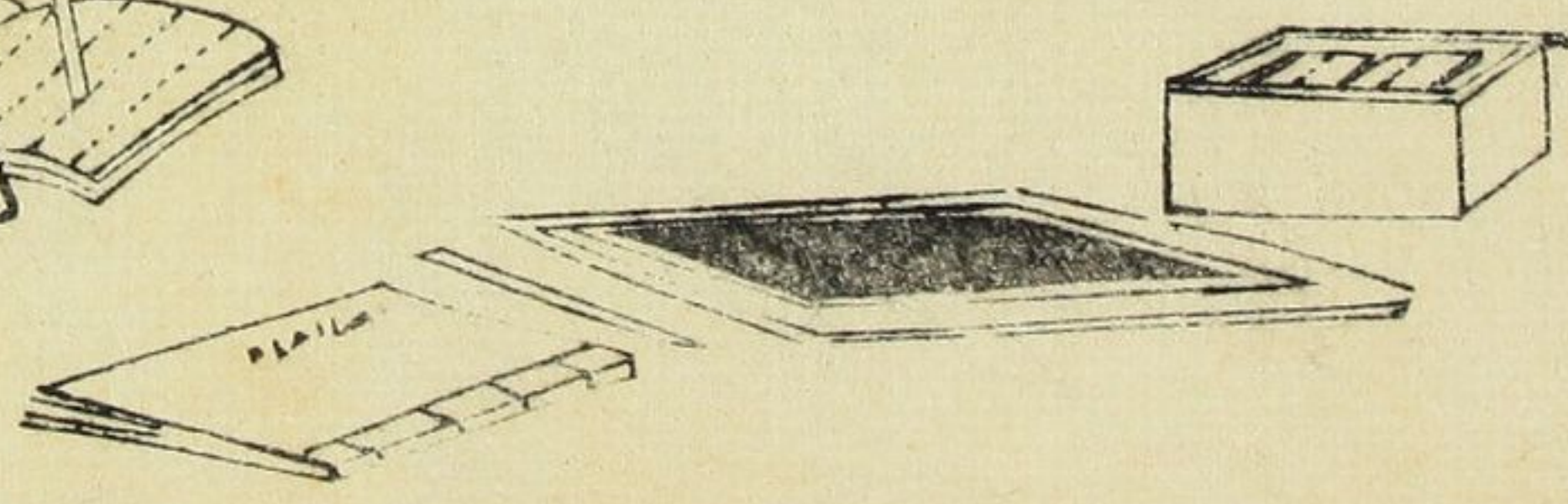
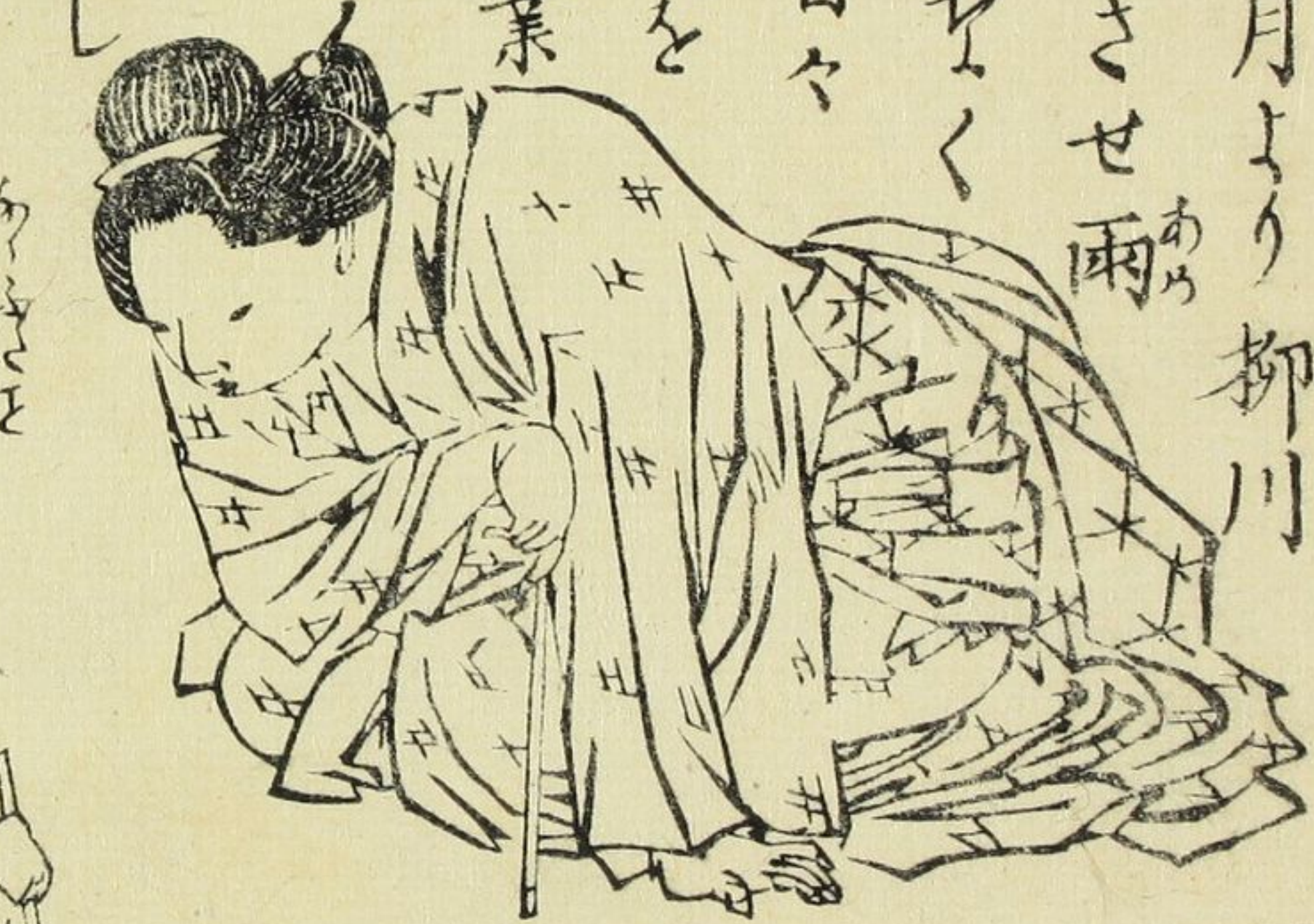
其日の業を暗記し

家に歸きバ勇太郎ハ諸科の

復習をさせ單語の文字抄

殊さうに子供の覺へごときもの
のなまむべとて自りこまを工夫し
て厚紙にて單語の「か」を作るたし
を作り數人の小兒を
よびあつめて俱にこまをとらじむる
など其教育
の切なるを近隣のものに感しんし
けるが勇太郎
ハ天稟のおと母の教育にて速に
進歩し同年九
月下等小學第八級を卒業したるを
以て母子と
もに縣廳へ御呼び出しにちり
勇太郎へハ窮理

圖解一部母おちゑにハ綿一斤御賞賜有りと
ぞ実ハ感心を婦人では有りません
天下中の
子供に斯う云ふ母親が持てる者で五さり并



〔東京日々〕

東京
讀賣
新聞



○お助け
をさつて
下さい
馬藏と
いふ男がうしろの
寐所へ来て無
理無体なと
を致して悔し
うござい外と
巡査さんへ
上とので糾さまると其娘が私ハ千住北組で山田やといふ

旅人宿の娘お里とや升が先日より親へ内々で家へ
泊って居り升岩代國會津産ま此運治郎といふ人
と深く成て居り升と家へ
泊って居り升お客で武州
川越左の山形馬藏といふ人が
今月十七日此晩に私の寐床へ
参りはしとく私へ定て運治郎と
思ふてウシとやいしと夫々跡で
気がつくと運治郎でいやく恐ろし大きい
馬藏で有りはしと私ハ悔しくて堪りほせん
何んでおんお馬藏に身を任せようぞおれ



御吟味を願ひ升と眞面目で云ひはしゝが此娘ハ
 年が十六でナント厚かほしい女でハ有りません
 ○東京本所中の郷元所北八番の緋屋の弟子仙吉と
 同所北七番地の髪結の弟子鶴吉と兩人ハ益氣の若も
 ので親方此眼を忍んで冗といりでももる年々中
 なり心づけがよい、仙吉ハ仕事まふと學校教師の許
 へかよひ鶴吉ハ隣り此士族さんに頼こまも仕ごとを
 しまふと一心に讀書を勉強いじまむが東八拳や
 端唄や浄るり三味線にうき身をやつと馬鹿を
 懶惰者とハ雲泥のちがひでござり外 (讀ッリ)
 明治九年八月出版

明治九年第五月十五日ヨリ一月毎三号出版

同改 第八月ヨリ毎月五号宛發兌

大坂府下

第三大區十小區

新町通二丁目北二番地

編輯印刷兼 八尾徳造

第一大區十四小區
道徳町二丁目一番地

出版人 新惣三島

確實 禹解新開



時吉屋車

第九号



○西京聖護院村の準提觀音の門前にて
 去る十二日の夜明まへ十八丸の男が
 剃刀にて咽喉を切り血汐と塗きて
 倒れ居る傍に男と女の
 下駄が二足有て
 懺悔に
 住持に
 名を記し
 て縋び付又たむこ入
 の中に書おき入さとり村の者より
 早速にとゞけ出たきゞすゞに檢視の



役人が来りて夫々
 取調べ
 午後六
 時頃駕に
 のせて書おきの
 通り竹や町の傘や中川駒太郎くく送り
 届けたり是ハ駒太良が養子音吉といふ者
 にて近ころ九太町此八百や松治郎が娘お
 安と密通して居るに此お安ハ幼少より
 云ひ名付此聲あきども不幸にして跛足となりけまハ
 お安ハ是を嫌ひて何とぞ音吉と夫婦とあんと思ひ



さぬくと心を苦しめたる様子
を
両親おささききびしれた異見いけんに身
此置所おきどころをかき心地こころして早く音吉ねきち方へ
相談さうだんに出でりけ迎むかひ此世このよでいむ
しうろ芝居しばいで見と通り未
来らいで一刃いつしよよりくさくさ

いあいうナルホド此節このせつの地獄じごくが
繁昌はんじやうだろ夫おつともよろらふ
と十一日の夜半よひに二人ふたりが半てを取り爰こゝに
三條愛宕さんじやうあいだうとち露つゆの命いのち此捨所すてどころの何所どこが
よろこぶうイヤ観音くわんおんさな此お仲立なかつりだちでいあ



お添書そへがきでも貰もらつくと大慈大悲だいじだいひの
門前かどまへにて州すまを褥むしろに二人ふたりの居ゐる
覺悟かくごのよいと云も終はつつ魂たま
消きる一撃ひとくちにお安やすの驚おどろき振か
返かへま逆さかしる血汐ちぢに音吉ねきち
朱あけに染しりて目めを見張みり
齒はをくひしがりて七轉しちてん
八倒はつたうアラ苦くるしやと
呻吟うげんく様さまハ目めも當あた
ぬ姿すがたなるにぞお安やすの憊うも醒さ
心こゝろも替かりて跛足はつちでも瞎目ちやくでも



活と男の方がいと履物もたき敢て真暗三方に逃
 出して我が家に歸り卧し居たるを女下駄の付扎て
 檢視の場所へ呼び出させ色くと聞紀しの上にて可
 預けと成りたるは音吉も彼の世も引越し切らまを
 京都府下に左籍中由へお安の方へもヒユードワ
 と出かけることせらぶと療養中なるは
 (以上陳綜)

○第三大區

六小區 靱南

通り二丁目 前田

庄太郎の娘千代(輕)

ハ容親ハ醜くカドガ

まどもいへいにくき性質
 め(現在の両親にも愛相
 をつらきま去る七年
 妻ごろろ雲川へ娼
 妓かせぎにやまて
 居りま一とがかん不
 心ダ夜又だとして
 知らぬ他國へや
 せしうへ夜毎く
 つと勤此せつ
 かさにとり當



春雲州を脱走して親元へ戻りしが根が
浮氣ゆへ先の苦勞もこころをきたてて間も
なく隣町の永代湯の風呂焚と

乳々くり合しが今で一生
どころろ二世三世も永

代も夫婦にあふんと
契りし中へ水さきをも

のう出来と此う焚付よううがひどかつと
のう女へ男にいやがうまししゆへ本月十

六日の夜十時をぎ湯や此濱くドンブリと
飛込しが折しも水へ平浮いて死ぬとも死



ねすキマールくアスくと苦しむ聲を近辺

の人々が聞付てそき助よとの聲もろく

ともてんぐに舟を漕行てよあ

引揚个抱

せしがその
甲斐有て

まづく正氣と

とちかへりしが
女の云ふよハ私ダ

死ぬるをナゼ助けと

救助の礼もいひせ
ポント一言逆ねちに比自々



コレ、ととあきまきけてるふんともことばやあうりしとど何ん
 あきまきと姉さんでへ有りませんう (大坂日報)
 ○東京湯島切通し坂町のうあぎやに同居の幸治
 郎はつと養女のおとりに無理をいひかけ又下谷力年町
 一丁目北松山直吉も息子北嫁のおりんへ無理をこ
 とをいひかけ困るので何きも巡査うあきまきとしが有と
 とりやが親父さんともいはきる身で娘達をいぢめる
 とハ瀆をいひけごと讀賣に出て有りほしと川柳も
 (姑と違ひ男比いぢりやう)又(とくさんゲツイ割かきまきこ
 筆)ふんどと云って有升ガイヤハヤ何ともかとも
 明治九年八月出版

明治九年第五月十五日ヨリ一月毎三号出版
 同改 第八月ヨリ毎月五号完發兌

大坂府下
 第五區十小區
 新町通一丁目北二番地
 編輯印刷兼 八尾徳造

第一大區十四小區
 道徳町二丁目一番地
 出版人 新惣三島

確實畫新
新開



第十号

叶吉
画圖



緒言

方今世ニ新聞紙ナルモノ有テ勸善懲惡ノ具トナルハ文ニ如クハナシト雖モ惜ムラクハ真片假名ノ文字モ解セザルモノアリ或ハ假名ヲ讀モ其意未ク知ラザルノ遺憾ナキニシモアラズ故ニ該新聞ノ如キハ廣ク各社ノ新聞ヲ參考ノ其讀難キ文字ハ假名ヲ加ル而己ナラズ兒女子モ解シ易カラシガ爲ニ稗史ノ体裁ニ倣ヒ画圖ヲ加フ冀クハ江湖ノ婦女子之ヲ一覽ノ知識ヲ廣メ共ニ開明ノ門ニ入ラシムコトヲ



官許 確實画解新聞

第十号

○新浮縣下小出島村の角家おともの亭主が生て居るうちハ勿論よくつかへ母親へも至つて孝行をつくし今でハ後家に成つても相かりつて母を大切にむるので此不ど御褒美を下さま

ま
○東京深川松賀町北小島音治郎の娘およしが永代橋より飛こんで死んだのハ何の子細りも聞くと同町の綱島兵藏の女房おざいと高橋留吉の女房おうみとがおよしさんの兵藏さんと

尾

い、中ごといいって諸方へふき

ちかしのでおは
一向知らあい事

由へ怒り出して

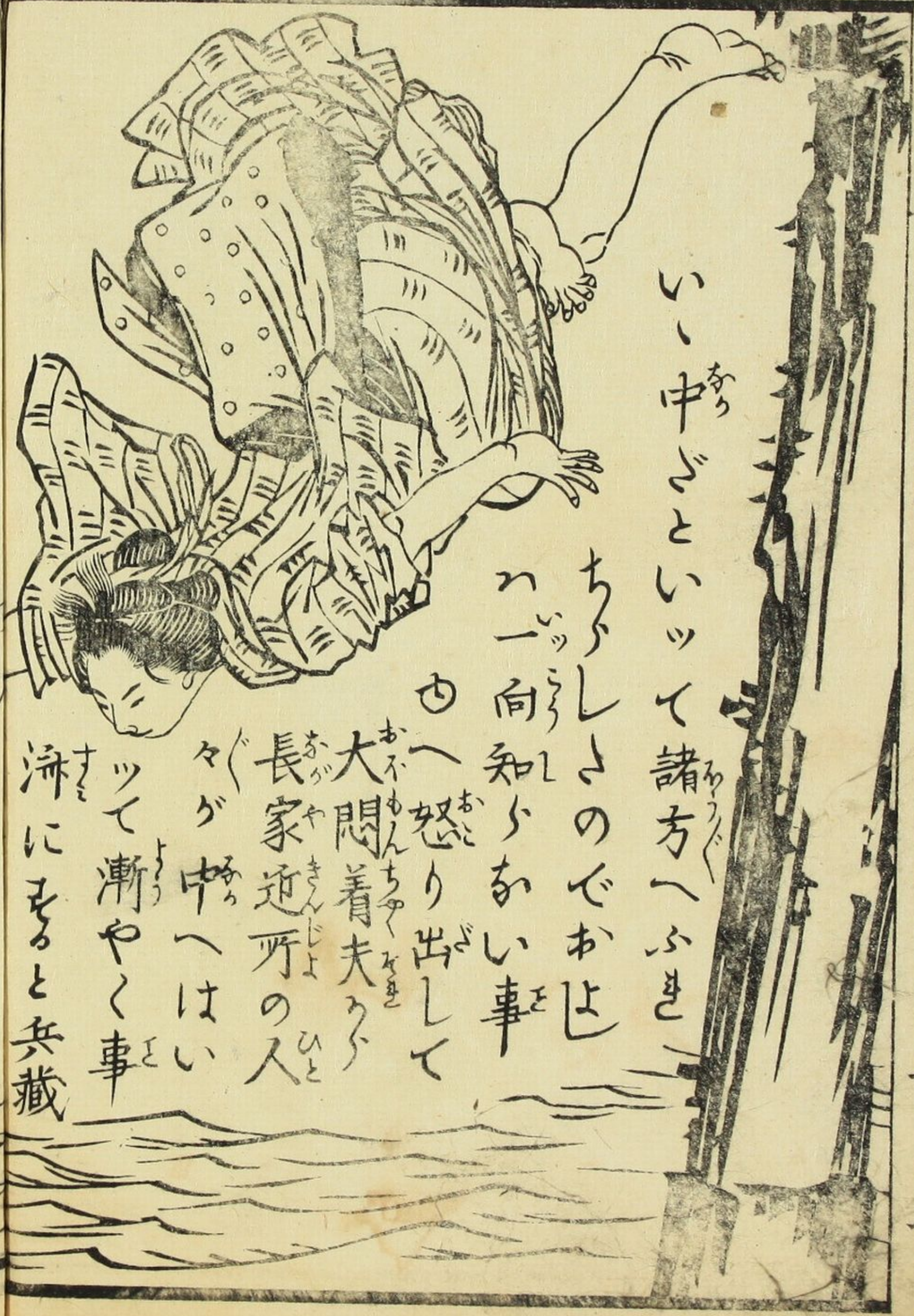
大悶着夫ら

長家近所の人

々が中へはい

ッて漸やく事

済にそると兵藏



ハ近所へ對して面目

いとておどいを離縁に

をると留吉もおどいさんが離縁になるか

うハ己の女房おろも離縁をるといひ出

夫でハ角がとつと又々人うはいり何のうの

と云て居るうちおよしがそんをに面どうに

なるあり私う死ぬるとり云て家を飛出して

ザンブリとやうしとのごと聞ましとが兎角

山の神連中のガラくの口軽囁々の後先見ぞ

へ人の迷惑にも構はぞとんておあひこと言ひ

觸るまのにハ突に閉口いとし升

○東京土手三番町五番地の人力車曳
沢田松五郎ハ一ツ橋通りで驚甲
の擲と煙州入を拾ひ夫を
畚けると落とし至小石
川牛天神下青木と子
人にて双方分署へ
出て受取り渡しと
あり礼ハ相對で相
應にむるがよいと
ちり青木ハ厚
く礼を述て金



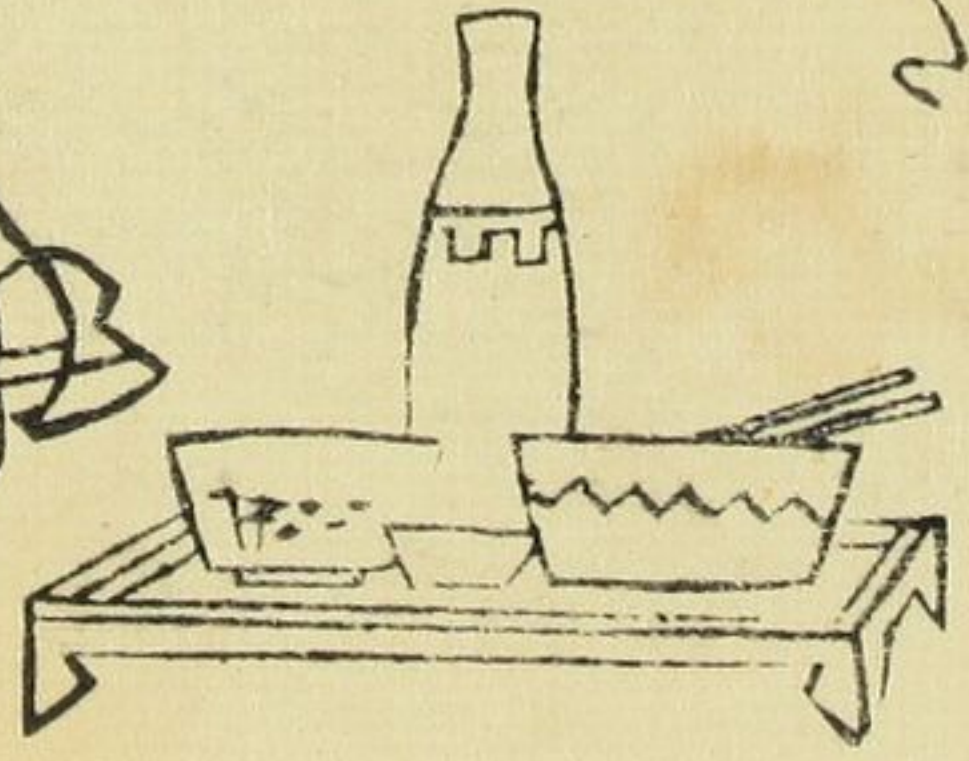
二田進上いとそろう
とゆかとお五郎ハ且
那此品がお半に入て
二田とハ餘り安いでハ
有りませんうせめい
五月う七田下さ
いと不足としく
いひ出しとゆへ神樂
町の驚甲やと袋物やと
を呼んで直を踏せると両方で一田
五十四錢と云ツとので青木が夫



でハ踏んど直ぐけあげやうと一円五十口銭を
松五郎へやりほしとガナント怒んちけきバニ
田もくへろ所を怒ばつとむりで四十六銭の
損をいとしましと突に大怒ハ無怒に似たりで
ありまゝやう

○是ハ今月十七日此晩のことと東京新藤町

十二番地の居酒やへズットはいと
一人り此男ハ石皿の蟹を横目で
にらみ新此焚ころがしを
斜に見渡し一寸一本お徹を
つけ一杯きけんの大愉快



やがて勘定が十一

銭六厘とあると

サア面目ないが一銭

もなし親方どやう明日

までかしてもういとい私

も士族で秋場言近といふも

どか決して食

遊ハ致さないと

言とけ半分遊足

をドッコイと

きませぬ毎度喰遊



でハ懲て居りますすうらどめでも錢が無け
れハ是迄鍋墨を顔へぬる極り有升ハ
十旗さんどろろ大まけおはけて紅を

塗ましやうといッて
顔中へコテくと
紅をぬると丸で
伊勢海老のゆで
のり西氏のニッ
切り同様お
真ッ赤に成ッて
こぢくくと居酒やを



飛出しとッ顔を洗ふ
天水桶も見あつて往來
を歩行ハ人に顔を見
ま子供ハ逃出を仕方
が無いので交番
所へかまど巡査
さんに中上る



と聞さハくし
予其顔ハとふしと何所
どッ疵所ハとことと
人ハ平氣で居る故
と巡査さん
心配な
紅を塗

以上
讀賣
新聞

たのびとつふことグ知きはしとマア外聞の悪い

○俳優花うらと片岡鶴

之助ハ本月十六日に甲

年を一期として黄泉に

芝居へ乗込しはしと

オナイコト

○俳優実川延若市川

荒五郎の一座ハ尾張の芝居

へ稼小行て居りはしとグ俄の大洪水

で小家も押流さき所持の荷物ものも

ど流さきしとグ幸ひ體ハ無事で歸ッて來は

明治九年九月出版



明治九年五月十五日第一号毎三番出版

同改

第八月ヨリ毎月五号宛發宛

大阪府下

第一區十小區

新所通丁目廿二番地

編輯印刷兼

尾徳造

第一區十四小區
道格町三丁目一番地

出版人

新惣三島

